

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/10/1 ～2017/10/31)

1. 勉学の状況

今学期履修する授業は①Labour Economics ②Institutional Economics ③Price and Competition Theory ④Behavioral Economics ⑤German as a Foreign Language の五つ。①は様々な環境の仮定の下で、企業と労働者の両者にとって最適な賃金・雇用量を決定する方法・過程を学んでいく学問。②は中級レベルのミクロ経済学で、効用最大化・支出最小化問題を初めの段階では扱っていた。③は産業組織論と大部分重複しており、完全競争市場・独占市場での企業の価格決定を実践的に行った。④は近年流行りの経済学で、人間の心理行動を理論に組み込んだ経済学。(ちなみに、2017年ノーベル経済学賞を受賞したテーマも行動経済学に関する研究)。これまでは少数の法則(Rule of low number)などがトピックに出てきた。①～④の授業は全て英語で開講されており、大半の授業は週2回行われ、理論を学ぶ授業と問題を解く授業とで分かれている。

私はドイツが全く出来ないままドイツに留学した変わり者で(千葉大学では初めてらしい)、まあ英語でもなんとか生活していけるだろうと出発前はたかをくくっていたのだが、やはりドイツ語を話せないと生活しにくく、下に見られている感じがする(個人の所感)ので、せめて生活が滑らかに進むくらいのドイツ語は身につけようと思い⑤の授業を履修した。今月は挨拶の仕方、質問の仕方を主に習った。

2. 生活の状況

【最初の印象】

デュッセルドルフに来て早くも1ヶ月が過ぎた。私はまずデュッセルドルフという街に慣れるために、大学入学前にデュッセルドルフを訪れあちこちを探索した。最初こそ画面越しでしか見たことのないヨーロッパの街並みを歩き愛でていたのだが、来独3日目には飛び抜けた見所が無いことに気づき、観光にはあまり向かない街だなあというのが最初の印象であった。

【食べ物についてあれこれ】

街のあちこちにパン屋があり、ドイツ人の食生活の中心を成しているのがうかがえた。またクオリティーも高く、特に個人が営んでいるお店で今までハズレを引いたことは無い。

移民を多く受け入れているからか、様々な民族の料理店があり、大半の店は自分が想像していたより味のクオリティーも高くて驚いた(正直、高級店にでも行かないと美味しいものは出てこないだろうと侮っていた。ごめんよ、デュッセルドルフ…。)しかし料金は日本に比べてなかなか高く、水を注文しただけで2ユーロ(260円)取られるのは未だに慣れず、貧乏性の私からすると心を痛めるものがある。

一方食材を売っているスーパーを見てみると、ほとんどの食材は日本より安い。特にバターと肉類は感動のものであった。そんな値段の安さという魅力を、レジの面倒臭さという不満が相殺、あるいは上回ってしまう。レジ袋が無いのはまあよしとしよう。けれども、カゴに入れた商品を全てコンベアーに取り出し、レジを通したのからその場で次々に袋に入れて行かないといけな
い、謎の焦らせる仕組みはいつまでも馴染める気がしない。一人で買い物するにはかなり辛いシステムなのである。

飲み物は炭酸入りのものが多い。いや、これが本当に多いのだ。ビールはもちろんのこと、オレンジ、りんごなどのジュース類、水に至るまで炭酸が入っているのだ。炭酸が嫌いな人が嫌でも炭酸を飲めるようになる国、それがドイツ。

【街の人々の性格】

ドイツに来る前のイメージとしては、とにかくルールに厳格で、冷たい対応をするというものだった。しかし実際に様々な人と会ってみると、かなり柔軟かつ丁寧に対応してくれたり、地図を持って歩いていると“May I help you?”と声をかけてくれる人もいたりしたりと、当初のイメージとかなり異なるものであった。

今回はレストランで払うチップの実態、デュッセルドルフ周辺都市のお話、ビザ取得は果たして成功したのか、について書いていこうかと思います。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/11/1 ～2017/11/31)

1. 勉学の状況

講義が進んでいくうちに、後悔することが一つ生まれた。それは“英語学習の授業を取る”ということだ。今期はディスカッション形式の授業は履修しておらず、講義形式の授業ばかりなのに加え、なまじドイツ語を習ってしまい、かつものにできるようになるために普段はなるだけドイツ語を使おうと心がけているので、英語を自力で書く能力と話す能力が凄まじく低下していているのを実感している。それに加え、先生が話す英語も時々ドイツ語の発音混じりなので聞き取りにくい時があり、少し苦戦することもある。自力で英語学習すればいいだけの話かもしれないが、やはり講義という形で習慣として使っていたほうが効率がいいので、来期は英語学習の授業を取ろうと思う。

ここからは各講義で何をしたのかを羅列的に書いていこうと思う。①Labour Economics: 労働需要における所得効果・代替効果、弾力性、労働供給における供給曲線が変化した際の最適な賃金・供給量の決定など ②Institutional Economics: ロビンソン・クルーソー経済、パレート効率、外部性、ピグー税など ③Price and Competition Theory: ナッシュ均衡、サブゲームにおけるナッシュ均衡、クールノー均衡、ベルトラン均衡などを求める問題を解く ④Behavioral Economics: これに関しては正直何をやっているのか全然わからないというのが現状だ。この講義はマスターレベルの授業であり、自分がまだほとんど習っていないレベルの数学的要素を使うので、それらが出てきたらお手上げ状態なのだ。言葉による説明の部分でも難解な単語もしばしば現れるため聞くのも大変であり、あらゆる面で自分のレベルより高いものである。少しでもだけ食らいついていければと思う。⑤German as a foreign language: 定冠詞、不定冠詞、格変化、方向を示す方法、施設の名前、動作を表す動詞など

2. 生活の状況

【日本では馴染みが無いチップの実態】

留学前に自分が気にしていたことの1つはサービスに対するチップだった。ネットで調べてみると、レストランでは料金の10%だとか、飲み屋では何%とか場面によって割合が違ったり、人によっても意見が異なったりとばらつきがあるので、ちゃんと払えるかどうか不安だったのだ。(特に、大きい金額の紙幣しか持ってなかった時、ぼったくられるんじゃないかと疑っていた。)

そして入国してから2ヶ月が経ち、何度かレストランなどのサービスを受けたが、ほぼチップを払うことは無かった。高額紙幣を出してもきちんとお釣りが返ってくるので拍子抜けしたものだ。チューターと“星が背景にある世界的なコーヒーチェーン店”に行った時なんか、お釣りで1セント返ってきたのでチップを集めるボックスに入れたところ、チューターから「チップ払うな

「なんて偉いねえ」なんて言われる有様だった。どうも最近ではチップを払うということ自体がなくなっているらしく、特に若い人達はほぼ払わないようだ。店員さんもお釣りを全額返してくれる人が大半で、お釣りを返さない店員さんも 10 セント以下でしか取らない。こちらとしても 10 セント以下の小銭はあまり使い道がなく邪魔なだけなので、特に文句を言うこともない。なので、通常のサービスには無いことをしてもらった時だけチップを払えば良いのではないかと私は結論づけた。他国ではどうか知らないが、少なくともドイツでは安心してお金を使っていたきたい。

【デュッセルドルフ周辺の都市】

デュッセルドルフがあるノルトライン・ヴェストファーレン(NRW)州には、ケルン、ドルトムントといった日本でも有名な都市が存在する。学生証についているチケットを使えば NRW 州内の都市近郊列車(S-Bahn)、路面電車(U-Bahn)、バスが乗り放題(*ただし、ICE・IC などの特急列車には別途特急料金が必要)なので、様々な都市に気兼ねせず探訪することができる。今回は上記 2 つを紹介しよう。

・ケルン…デュッセルドルフから普通列車で 50 分、RE(Rhein Express:日本でいう快速電車)なら 30 分程度で行ける。初めて行った時、車内で眠っていた私はケルン中央駅に着くというアナウンスで目を覚ました。眠い目をこすって窓側を見ると、歴史の風格と異様な存在感を放つ大きな聖堂が現れたのである。あんな凄まじい建物は一生忘れないし、何度見ても心動かされてしまうだろう。駅を降りたら早速大聖堂の中へ。日本の神社とは全く種類が異なる荘厳さが空間全体に広がり、パイプオルガンの生演奏が神聖さをより一層引き立てる。一日中本を読んで過ごしたい、そんな場所であった。

そこから少し移動して、ライン川のほとりを散策。冬には寒いですが、季節を選べば散歩するには最適の場所であり、また多くのレストランやクナイペ (Kneipe:ドイツ語で居酒屋のこと)が立ち並んでいて、夕暮れ時なんかは特に賑わっている。ちょうど晩飯時だったので、一軒のレストランに入り、魚のグリルを注文。相席した老夫婦と歓談しながら料理に舌鼓を打ちつつ、眺望を楽しみ、満足のいく時間を過ごせた。一人でも、友人とでも、どちらにも素敵な時間を与えてくれる魅力がケルンにはある。是非一度行ってみたいはいかがだろうか。

・ドルトムント…デュッセルドルフから普通列車で 1 時間半、RE なら 1 時間くらいで行ける。駅前にはボルシア・ドルトムントのファンショップやスポーツ体験施設があるが、正直あまり観光するところは見当たらない。デュッセルドルフよりヒドいと断言してもいいと思う。サッカー観戦か練習を見に行くなど以外の目的であまりくる場所では無いな、というのが個人の印象である。特に見るものもないし帰ろうかな、と思ったその時、何やら人だかりがあるのを発見。近づいてみるとすごく大きなイベントが開催されていた。出店のコーヒー屋で一杯注文したついでに何のイベントか聞いたところ“ザンフェマルクト”(Sanfemarkt)という年に一回のイベントらしい。食べ物・飲み物をはじめ、革製品・ブックカバー・アクセサリーなどのグッズもかなり充実して

いた。驚いたのは出店で甲冑の頭部や剣などの武器を売っていたことだ。連邦法や州法がどうなっているのかは詳しくは知らないが、あんなの売って大丈夫なんだろうか。どうか本物で無いことを信じたい。

というわけで、普段は見所は少ないが、イベントを狙って行って見るとドルトムントはかなり面白い街なのではなかろうか。ザンフェマルクト以外にもイベントはまだまだあるはずなので、今後も調べていこうと思う。NRW 州には、他にも魅力的な街があると人づてに聞いているので、そこに行ったらまた報告していきたい。

【悔るなかれ、ビザ取得】

もしドイツに留学したくて、この報告書を読んでいる人は、ビザの申請はなるべく早くした方がいいことを覚えておこう。IS(Islamic State:イスラム国)による軍事侵攻などの影響でドイツに大量の移民が流入していることはニュースで知っていたが、実際に移民局に行ってみるとそれを実感できる。朝 7 時半に行ったにもかかわらず、長蛇の列を成しているのだ。付き添ってくれたチューターが「5 時半くらいに来なアカンかったかなあ」(*日本人でも、関西弁ユーザーでもありません)と言っていたが、それほど皆ビザを取るのに必死なのだ。

ビザを取得するために必要な書類などは、ドイツ連邦共和国大使館のホームページ(<http://www.japan.diplo.de/Vertretung/japan/ja/02-Service/021-visa/Longterm.html>)

に詳しく記載されているのでそちらを確認してほしい。ここではビザ取得までの簡単な手順を書いておく。①入国後 1~2 週間以内に住民登録局に行つて届出を行い、登録証書を貰う。②入国後 90 日以内にビザの発給を受けられるように外国人局に行き、ビザを発給してもらう。(なんや、たったのツーステップやし、チューターもいるからなんとかビザ取れるんちゃう?) なんて気楽に思っていたのが懐かしい。では、実際の自分はどうだったのかを記していこう。

①入国 1 ヶ月後に住民登録局に行った。仕方なかったのだ、チューターとの都合が合わなかったのだから。かなりドキドキしながら住民登録局に行ったが、特段問題なく登録証書を貰えたのでひとまず安心した。しかし、この1ヶ月という期間が想定外の事態をよぶのだった…。②証書をもって2、3週してから外国人局に行き、最終手続きをする日取りの予約をしたのだが、なんと2 月後半の日付が記されているのだ。他の人に聞いてみると、どうも住民登録を2週間以内にやった人は12月の日付の人がほとんどだった。というわけで、私のビザ習得は3月くらいになると思われる。ビザが無いとドイツ国外へ出られなくなるので、長期休みに他の国に行きたいと考える人は早めに申請しておこう。

次回は【潜入！クリスマスマーケット】、【ドイツの宅配事情】、【暮らすとわかる日本人とドイツ人の気質の違い】について書いていこうかと思います。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/12/1 ～2017/12/31)

【お詫び】

先月の報告書でいくつか間違いがありましたので、この場で修正するとともに謝罪いたします。
(1)勉学の状況にて、④(中略)少しでもだけ食らいついて…とありますが、④(中略)少しでも喰らいついて…が正しい表記です。

(2)デュッセルドルフ周辺の都市を紹介するコーナーで、^{エールエー}RE という列車を Rhein Express と紹介しましたが、正しくは Regional Express です。

(3)報告期間が 2017/11/1~2017/11/31 となっていますが、お気づきの通り 11/31 という日には太陽歴をはじめ、地球上のあらゆる暦には存在しません。

これらは、ろくに校閲することなく提出してしまった己の不届さから産まれたものであります。今後はこのような誤りが無いように努めて参ります。すみませんでした。

1. 勉学の状況

今回は少し変わった講義があったのを紹介しよう。それはドイツ語の授業で起こった。食材の名前についての講義をひとしきり終えたところで、先生から「せっかくだしみんなで食べ物を持ち寄ってパーティーしよう！あ、でもパーティー始める前に自分が持ってきた料理がどんな食材から出来ているか紹介してね。」と提案されたので、みんな乗り気で賛成した。そして当日、各国の郷土料理やお菓子がテーブルに並んだ。ちなみに私は、日本から持ってきた落雁を持っていき、「Das heißt Rakugan. Das ist Japanische traditional Süßigkeit, gemacht mit Reismehl und Japanish Zucker, Wasanbon.」とか言って紹介した。日本のお菓子はかなり人気なようで好評を博しており、自分としてもクラスメイトの母国の味を知れて勉強になった。

このように、授業のテーマに合わせて柔軟にアクティビティを行う部分は日本ではまず見られないので大変興味深かった。授業でパーティーとまではいかなくても、実物を使って勉強するスタイルは座学とは違う刺激を得られるので、文理問わず日本でも導入していても良いのではないだろうか。

2. 生活の状況

【潜入！クリスマスマーケット】

11 月初旬あたりから、デュッセルドルフではクリスマスに向けてマーケットが開かれた。これはデュッセルドルフに限った話ではなく、ドイツ全域で言えることだと思う。そう、クリスマスはドイツ人にとって一大イベント、皆でグリューワイン(ホットワインに近いもの)を飲み、美

美味しいものを食べ、楽しい時間を共有する1ヶ月半なのだ。そんな賑わいを見て心踊らせてしまった単純な私は、各地のクリスマスマーケットに赴いたのだった…。全部を紹介しては長くなりすぎるので、今回は特に良かったと思うエッセンとニュルンベルクの二つを紹介しようと思う。

・エッセン…デュッセルドルフから^{エールエー}REで30分程度で行ける街。世界遺産であるツォルライ
ン炭鉱があり、夜に見にいくとすごくロックな感じでカッコイイのだが、それはまた別のお話で語るとしよう。駅を出てすぐにLEDライトで出来たツリーとプロジェクションマッピングで宣伝するマーケットが現れる。道なりに続くマーケットの光に誘われるようにして進むと

^{アルトシュタット}Altstadt(旧市街地)の広場に出る。この点がエッセンのクリスマスマーケットの優れた所で、メインの場所に辿り着くまでの導線の造りが上手く出来ており、気分を高めながら行ける。

^{アルトシュタット}Altstadtに着くと、露店の上にある美しい山型のイルミネーションに目を奪われる。イルミネーションを堪能したら、露店に目を向けてみよう。興を削ぐかもしれないが、どの都市のマーケットでも売っているものは大体同じである(ブルスト・アクセサリー・ツリーの飾り・革のブックカバーetc)。それ故、都市オリジナルのものが売っていると、お宝を見つけたトレジャーハンターのような気に(ほんのちょっと)なれる。エッセンではお祭りの輪投げや射的のように、ゲームのスコアでもらえる商品が変わる露店が物珍しかった。お気に入りの商品を見つけようとして歩き疲れた時は、焚き火付きの休憩場に行こう。地味ではあるがこれもまた、他の都市には無いエッセンのクリスマスマーケットの魅力である。私はこの休憩所で火にあたりながら

^{アイアープンシュ}Eierpunch(たまごリキュールを使った飲み物)を飲み、冷えた体を温めた。このようにエッセンのクリスマスマーケットは、老若男女問わず周りやすいところなのである。

・ニュルンベルク…12月後半のある木曜日、同じ寮に住む日本人の先輩から「今度の週末、暇？ニュルンベルクのクリスマスマーケットに行こう！」と誘われたので、二つ返事で承した。その時はニュルンベルクという場所がどこか知らず、(まあ直前に誘ってくるぐらいやし、そんなに遠くはないやろう)と予想していたのだが、すぐそのあと、「じゃあ、朝の6時15分に寮の玄関集合ね。」と言われ度胆を抜いた。なんとデュッセルドルフから8時間もかかる(RE2回乗り換えの場合)のだ！

当日、列車に揺られながら、なんでニュルンベルクに行こうと思ったのか聞いたところ、「ニュルンベルクといえばクリスマスマーケット、クリスマスマーケットといえばニュルンベルク」だからだそう。それが本当かどうかは現地に行ってみたら明らかであった。外国からの観光客の割合が高く、そして会場の規模がかなり大きいからだ。規模が大きいということは、それだけお店の数も多いということになり、NRW州では見かけなかったお店も結構あった。ここで食べ

たポークステーキのハンバーガーは、ドイツでは珍しく絶品の味だったので、もし行くことがあれば是非お店を見つけて食べてみてほしい。また、日頃あまりお金を使わない私でも、思わず買いたくなってしまふものがあったので、きっと行った人全員が一つは欲しいものが見つかることだろう。それほどに品揃えが多く、見て周るのに楽しいマーケットであった。

【ドイツの宅配事情】

私が日本を発つ前、ヤマト運輸が再配達締切時間を前倒し、お昼の再配達を取り止めるなどサービス縮小の兆しがあったけれども、それでも他国に比べてホスピタリティはかなり高い、とドイツに来てから実感した。では、宅配のホスピタリティが相対的に低い国ではどう行われているのか紹介しよう。

生活に慣れたとはいえ、やっぱり故郷の食べ物が恋しくなることもしばしば。そんな時は実家に差し入れをお願いして送ってもらう。今まで3回差し入れを送ってもらったが、最近の国際郵便は自分の想像以上に進歩しているようで、日本からドイツまで早ければ3・4日、かかっても7・8日で届いた。いずれの時も直接受け取ることは出来なかったのだが、残念ながらこの国で再配達をしてくれることは無い。たとえどんなに大きい荷物でも自分で配送センターまで取りに行かなければならないのだ。車がないとかなりシビアなシステムである。

しかし、ドイツの運送会社も不在のたびに持って帰るなんていう面倒なことを必ずする訳ではない。同じ建物に住んでいる他の人にも届け物があり、かつ在宅していた場合は、見ず知らずの人の荷物をその人に預けてしまうのだ。そのせいで女の子が1人、夜遅くに自分の部屋を訪ねてきてわざわざ荷物を持ってきてくれた時は、本当に申し訳なく思った。女の子にこのような大変なことをさせないためにも、せめて日本の運送業界だけでも再配達システムを残してくれることを切に願うばかりである。

【暮らすとわかる日本人とドイツ人の気質の違い】

暮らすとわかる、というのは些か誇張表現であるが、これまでの経験や現地人との話でわかった違いについてここでは記していこうと思う。

これまでレストラン・デパートなど、様々なサービス施設を利用してきたが、サービスを提供する側からアプローチをしてくることは少ない。例えば、レストランで席に着いてから少し間を置いて注文を取りに来る、なんてことは無いわけである。何かをお願いするときや頼む時は、基本的にこちらから声をかけなければならない。

日本では相手から声をかけて来ることが多いと思う。私に身近な話題だと就活がその一つだ。企業からの求人広告やインターンシップ募集の情報を見て、それから企業に応募する。しかしドイツでは自分で働きたい企業を調べて見つけ、それから「インターンさせてくれないか」とか「働かせてくれないか」と行ったアプローチを自らかけていくという手順である、とチューターから聞いた。ドイツに限った話では無いかもしれないが、自分がどうしたいのかをハッキリ示さなければ何もすることが出来ない。逆を言えば、意思表示さえすれば融通を利かせてくれることもま

まあることなのである。

日本人とドイツ人は共に真面目で勤勉な国民性である、という認識を持っている人は結構多いのではないだろうか(実際私もそうだった)。しかし、日本人とドイツ人の間で『勤勉』という概念に大きな違いがあるということがわかった。日本の『勤勉』とは、休みの日も勉強する・働くといった感覚だが、ドイツの『勤勉』はお休みの時間以外で頑張っている量が多いことを示している。日本に留学経験のあるドイツ人学生は、日本の旅行代理店に行くと海外旅行のツアーが日単位で組まれていることに驚くそうだ。ドイツでは週単位で海外旅行するそうなので、それからすると急がしい休みに見え、お休みをちゃんと取っていないように思うらしい。この目新しい『勤勉』という概念、あなたはどうか受け止めるだろうか…？

次回は【小柄な自分がドイツで服屋の年末年始セールに行ってみた】、【1120キロ移動した話】、【怪我人多数！？年越しだけのデンジャラスなイベント】について書いていこうかと思います。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/1/1 ～2017/1/31)

1. 勉学の状況

前期の授業が終わったので、今回は前期の授業での自分の姿を簡単に振り返りながら、これを読んでくださっている方に「こうはなって欲しくない」という、言わば悪いお手本をお見せしようと思う。

正直に申し上げて、ほとんどの授業は何言っているのかよくわかりませんでした。資料があるので辛うじて分かる程度で、毎週話の理解も出来ない授業に行くのが苦痛で苦痛で、それゆえネガティブな気持ちになりペンを持つ気力も湧かず、さらに理解が追いついていかないという負のスパイラルが起こったのだ。そんな姿の自分が情けなく、惨めで醜いことは重々承知しているものの、それがより一層冷静さを無くしていき、ますます何もしなくなっていくのだった。

こうなった原因の一つとして、事実と解釈の誤認がある。授業が理解出来ないという事実に対して、自分は出来ない人間なんだというマイナスの解釈をしてしまい、次に進むことを自ら諦めてしまう。大切なのは、上手く行かない時に自己否定するのではなく、まるで他人事のように突き離して事実を理解し、上手く行く為に何が必要かを考え、やる事が決まればそれを本気で実行する事だ。今期の悪いお手本が良い過去の思い出となるように、来期は諦める暇も無いくらい死ぬ気で勉学に取り組みたいと思う。

2. 生活の状況

【小柄な自分がドイツで服屋の年末年始セールに行ってみた】

年末年始で大学が休みのある日、急にどこかへ出かけたくなった私は ハウプトバーンホフ Hauptbahnhof(中央駅) に赴き、列車の行き先案内をボーッと眺めて、目に付いた場所に行くことにした。その日はどうやら、ベートーヴェンのふるさとで旧西ドイツの首都・ボンを訪れたかったらしい。ボンまでは1時間以上かかるので、駅でコーヒー・チョコクロワッサン・アップルパイを購入し、ドイツでは珍しい晴れた日の車窓のお供にして味わった。

ボンに到着。市内をひとしきり散策した後、ベートーヴェンの実家以外特に観るところが無いことに気付く、思った以上に時間を持て余してしまった。そこで歳末セール中の大手服飾店に入り、日本と何か違いがあるのかを調べつつ、良い服があれば買おうと目論み、お店に突撃したのだが、そこには日本では考えられないような有様が広がっていた。なんと売り物である服が床に散らばっているのだ!もちろん、店員さんが落ちた服を元に戻したりするのだが、なぜか数分後には元通り(?)散らばっているのだ。その上自分が予想していた通り、自分に合うサイズの服が無かったこともあり、買う気が失せてしまった。果たしてこれは、文化の違いということで受け入れていいものかどうか思いながら帰路につく私であった…。

ちなみに、服はサイズが合うものは無いが、靴ならたとえ足が小さくてもサイズが合うものがあるので、靴が壊れたりしても安心して良いと思われる。

【1120 キロ移動した話】

昨年 11 月某日、私は夜の ^{ハウプトバーンホフ} Hauptbahnhof にいた。人生で初めての夜行列車・片道 560 キロの旅の始まりに、胸の高鳴りを抑えられないでいた。23時36分、さっそく 17 番線から乗車。今回の旅は贅沢に往復一等車の席を予約した。一等車はコンパートメント式の座席を相席で使う仕様。二等車より座席の幅が広く、座面は前後に動かすことが出来るので、長距離の移動でも比較的快適に過ごすことが出来る。電灯の消えた車内で、明日到着する土地に思いを寄せながら眠りについた。

翌朝 5 時 35 分、目的地に到着。そこはベルリン、まだ暁の訪れぬドイツの首都があった。ホームを降り、ベルリンではよく見かける“アインシュタインカフェ”でカフェラテを飲み時間を潰した後、ブランデンブルク門に向かった。朝に行けば観光客もいないし、良い写真も取れるだろうと意気揚々だったのだが、なぜか観光バスが 2 台、地面に垂直に並んでいて門を塞いでいた(!)

ので、あまりはっきりと見れなかったのが心残りである。そこから向かったのは ^{ライヒスターク} Reichstag(ドイツ連邦議会議事堂)、いわゆるドイツの国会議事堂である。事前に予約しておけば内部を見学でき、ガラスのドームからはベルリン市内から一望できる。見学を終え、次に向かったのは 博物館の島。シュプレー川の中洲に集まった五つの博物館を指す。ドイツの博物館は基本的に写真撮影が OK。気に入った展示物があれば写真に納めることが出来る。ちなみに私は古代ギリシャやローマの彫刻を観た。そして次に向かったのは ^{ハッケシェ・ヘーフェ} Hackesche Höfe、ベルリンで一番有名な複合カルチャー施設。東ドイツの信号機のキャラクター、“アンペルマン”のショップや新進気鋭のデザイナーの雑貨屋などの様々なお店が 8 つの区画に別れて立ち並んでいる。私はここで、牛革の変わった形の財布をお土産に購入した。ここで 1 日目の観光は終了。ホテルに戻り、早めに休憩することにした。

2 日目、雨が降ったり止んだりする中、私は ベルリンの壁を訪れた。壁に沿ってしばらく進むと、軍服姿のお兄さんが立っていた。何をしているのか聞いてみたところ、旧東ドイツ時代の各国の検問を越える際に使われたスタンプをパスポートに押してくれるとのことなので、旅の記念に押しもらった。お昼ご飯には東ドイツに来たら絶対にコレと、ある人に言われてフォーを食べてみた。どうも東ドイツにはベトナムからの移民が多いらしく、フォーの店がそこそこにある。

本当に味は美味しいので是非食べてみてほしい。その後、^{ポツダマーブラッツ} Potsdamerplatz で偶然やっていたイベントに参加したり、美術館で絵画鑑賞したりして気がつけば夜に。ベルリン最後の晩御飯は“一心”というお店で鰯をいただいた。久しぶりの日本の味に感動して、思わず涙を流してしまった。

大袈裟な表現ではなく本当の話である。おそらく、ご飯を食べて涙を流すことは人生で何回もあることでは無いだろう。ベルリンにまた行く機会があれば、もう一度行きたい店である。

3日目の朝、ホテルをチェックアウトしてベルリンからマグデブルクに用事があって行ったのだが、マグデブルクに関してお伝えすることは本当に何も無いので割愛させていただく。なんやかんやで25時30分(!)、夜行列車に乗ってデュッセルドルフまで戻って1120キロの旅は終了。以上、ベルリン・マグデブルク2泊5日の旅行記でした。

【怪我人多数！？年越しだけのデンジャラスなイベント】

ドイツに限らず、ヨーロッパ各地では^{シルベスター}Silvester(大晦日)に花火を打ち上げるのが習慣のようである。ドイツでは、花火は威力や大きさによって4段階のクラス分けがなされており、第2級以降は12月29日～31日までの三日間しか販売されない。その上、18歳以上でかつ、パスポートなどの身分証明書を持っている人でないと購入を許されない。それもそのはず、市販で90メートル上がる、威力満点のロケット花火を売っているのだ！折角の機会なので、私はそのロケット花火も含め、160発分の花火を購入した。

そしてSilvester当日、友人と共に中心街にやって来た。ドイツでは教会・病院・老人ホームの近く以外なら、家の前だろうが繁華街だろうがどこであっても花火を打って構わないらしく、

多くの人は^{アイトシュタット}Aitstadtなどの繁華街で打ち上げる。夜11時、すでに街中ではそこかしこでロケット花火が飛び交い、爆竹により爆音が鳴り、上手く飛んでいかなかったロケット花火が目の前で炸裂する、いつテロが起こってもおかしくないようなクレイジーな状況なのであった。

こんな状況で警察が警備する意味があんのやろうかと首を傾げながら、年越しが近づいてきたので花火を準備し、次々に打ち上げていく。年を越した瞬間から15分くらいは花火の轟音と光、そして次々と怪我人を運んでいく救急車のサイレンが鳴り止まない、日本とは540度違った新年の迎え方であった。私と友人はゲラゲラ笑いながらこの狂乱の年末年始を楽しんだ。こんなデンジャラスな年末年始、あなたの是非味わってみては如何だろうか？

次回は【実は芸術の街？デュッセルでオペラ鑑賞してみた】、【デュッセルドルフ周辺の都市 第2弾】、【予告：東南欧25泊26日の旅】について書いていこうかと思えます。来月・再来月は勉学の状況で書くことがあまり無いと思われるので、生活の状況のテーマ数を増やすかもしれません。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/2/1 ～2017/2/28)

1. 勉学の状況

これといって書くこともないので、今月はお休み。

2. 生活の状況

【実は芸術の街？デュッセルでオペラ鑑賞してみた】

昨年の某日、Facebook のページを開いてみたら『Oper!』を名乗るグループから招待されていた。メッセージを見てみると「明日の夜 7 時にオペラ座の前に集合で」とか「誰か一緒に行こー」とかドイツ語で言っているのだが、自分にはまるで身に覚えの無い話だったので「ごめん、これ何の話？」と聞いてみたところ、(デュッセルドルフにあるオペラ座に公演を観に行こう!)という企画で、自分はどうやらホストによって間違って誘われたらしい。「当日でもチケットは買えるから行ってみる？」と聞かれたので、この際行ってみることにした。

そして公演当日、オペラ座ということもありちょっと小ましな格好で向かうと、カジュアルなジャケットやタキシード・ドレスを召した妙齢の紳士淑女があちこちに見受けられ、(これちょっと場違いなのでは…?)と思いながらもチケット売り場へ。驚いたことにオペラ座にも学割という仕組みは存在しており(座席は指定できないが)、一枚 10 ユーロでチケットを買うことが出来た。その後他の面子とも合流し、いよいよ劇場内へ。

今回の演目はオッフェンバッハ作『Les Contes d'Hoffmann』(邦題：ホフマン物語)。詩人ホフマンが恋した三人の個性的なヒロイン(機械人形・絶世の美女であり、とんでもない悪女の娼婦・歌姫)と、運命の糸を引く三人の悪魔、そして彼を見守るミューズが織りなす幻想的なストーリーに加え、音楽も最高に充実している、エンターテインメントと芸術性を見事に兼ね備えた、ワクワク感満点のフランスオペラの傑作(※引用元：『フランスオペラの楽しみ』 URL: <http://qqcumb.web.fc2.com/hoffmann.html>)。途中、2 回の休憩を挟みながら 4 時間の公演を行う。休憩の間は食事やお茶をしながら談笑している人が大半だった。私も軽食を購入し食べてみたのだが、流石にオペラ座ということもあり、家庭よりも断然クオリティーの高い料理で非常に満足した。

さて、オペラを見る時におすすめることは、事前の下調べをちゃんとしておくことだ。日本の『劇団四季』のように地方の方言に合わせてセリフを変える、なんていうことは無く、ドイツ公演でもその作品を原文のまま行われる。『Les Contes d'Hoffmann』では演者はフランス語で演じ、ステージの上の壁にドイツ語訳のセリフが映し出される、という形式だった。よって予めストーリーを知っておかないと十分にオペラを堪能することが出来ないのだ。逆を言えば、ストー

リーさえ知っていればセリフで何を言っているのかわからなくても楽しめるので、オペラを観に行く時は準備をしておこう。

初めて来てから飽きを感じるまでに一週間とかからなかったこの街で、思わぬ娯楽を発見できたことは個人的に非常に大きく、暇な時間ができたらまた訪れたいと思う。何かの間違いで1週間以上デュッセルドルフに滞在する人にはおすすめの施設であった。

【デュッセルドルフ周辺の都市 第2弾】

今回はクリスマスマーケットの紹介でも触れたエッセンと、NRW 州の北側にある街ミュンスターを紹介していこうと思う。

・エッセン…デュッセルドルフから RE で 30 分くらいで行ける小規模都市。クリスマスマーケットを見終わった帰り、何の気なしに駅の地下に降りてみると、そこはブルーライトでシックなかつこよさを醸し出すホームがあった。あんなにかっこいいホームは他で見たこと無かったので、しばらく眺めて楽しんでいると、世界遺産・ツォルライン炭鉱方面の列車がやって来た。その列車に何故か魅かれるものを感じたので、すっかり夜も更けたというのにツォルライン炭鉱を見て行くことにした。

10~15 分で到着。正面から中に入ると、無骨な鉄骨と煉瓦で造られた巨大な建物や、掘り出した石炭を運び出すベルトコンベアー跡、集めた石炭を他の都市に運ぶための線路跡があり、夜で人がいないということも相まって、まるでロックバンドのミュージックビデオに使われそうな、青少年には堪らないクールさが漂っているのだ。1人で何も考えず、ただただソリッドな雰囲気に関心したい、そんな時はエッセンに行ってみてはどうだろうか。

・ミュンスター…デュッセルドルフから RE で 1 時間半かかる、NRW 州北部の街。駅の周辺をパッと見たところ、恐ろしいほどに見所が無かったので(これは失敗したかな)と思ったのだが、Altstadt(旧市街地)に行ったところで、その疑念は払拭された。両側に建つ真白き壁の建物、ゴミが見当たらない石畳の道路、建物の窓から現れる仄かな光。そう、非常に磨かれた美しさがあるのだ。NRW 州では道路にゴミ・タバコの吸い殻・フン(犬猫だけでなく、たまに人間のもある!)が落ちているのが基本なので、この綺麗さには相当驚いたものだ。その美しさに酔いしれながら歩を進めると、鐘の音を街へ響き渡らす教会があったので、試しに中へ入ってみることにした。するとここもだ。白亜の壁に白亜の天井。しかし、決して人を圧迫する純白ではなく、全ての人を優しく迎え入れる落ち着いたある白い空間に包まれるのだ。今まで見たヨーロッパの美しさとはまた種類のことなる、清廉さとも言うべき美しさに思わず息を飲んでしまった。何がしかの疲れで心を癒したい・穏やかにしたいというときは、ミュンスターを訪れてはいかがだろうか。雪月花に引けを取らない清廉さが、あなた方を迎えてくれることだろう。

【予告：東南欧 26 泊 28 日の旅】

2018 年 1 月某日、2 人の男は部屋でピザを食べながらこんな話をしていた。

A「ねえ、俺春休みに東欧を旅して周ろうと思ってるんだよね」

B「へえ〜、そりやすごい。どこに行こうとしてんの？」

A「チェコとオーストリアとハンガリーかな。あ、後スイスにも行きたい。」

B「それならついでにイタリアもちょっと見て行って、ぐるっと一周する感じで旅したらもっと面白くならん？そのぐらい壮大な旅なら俺も一緒に行きたいなあ。」

A「いいねえ。じゃ、それで行こっか。」

B「そやね〜」

こんな軽い感じのノリから約1ヶ月にも及ぶ旅の企画は始まった。その後、旅行に無理のない径路と行きたい都市の選択、その他諸々の準備を行い旅程が決定した。

◎デュッセルドルフ〜チューリヒ(スイス連邦、またはヘルベチア連邦、5泊6日)〜ミラノ(イタリア共和国、3泊4日)〜ヴェネチア(イタリア共和国、4泊5日)〜ブダペスト(ハンガリー、3泊4日)〜ウィーン(オーストリア共和国、4泊5日)〜プラハ(チェコ共和国、3泊4日)〜ドレスデン(ドイツ連邦共和国、1泊2日、ここで友人とはお別れ)〜ベルリン(ドイツ連邦共和国、3泊4日)〜デュッセルドルフ◎

(ほとんど東欧の方に行つてくれない?)というツッコミが多数ある事を執筆段階で予測している私は、「ここでいう東南欧は、あくまでドイツを基準に見たものである」という言い訳を予め差し込んでおくこととする。そんなこんなで夢と浪漫溢れる東南欧26泊28日の旅、来月始動!

A「あれ、お前まだビザ取つて無くな？」

B「!!!!!!」

【東南欧26泊28日の旅：第0話〜翼じゃなくて、ビザをください〜】

そうだった。いつぞやの報告書にも書いたが、シェンゲン協定の規定日数を超えて滞在する人は、ビザを貰っていないと国外に出ることが出来ないのだ。というわけで2月後半のある日の早朝、ビザをもらいに行くことに。様々な人の証言から、ビザには2つのタイプがある事がわかった。1つは日本国のパスポートに必要な情報が書かれた紙を直接貼るシールタイプ、もう1つはパスポートとは別にカードを発行するカードタイプだ。シールタイプのものはその場で支給してくれるし、発行手数料も安い。カードタイプのものだと発行に3週間から1ヶ月かかる上に、発行手数料は少し高くなる。恐ろしいのはどちらかのタイプを自分の好みで選べない事だ。シールタイプが来ることを祈りながら、事務所の中で順番を待つ。待つこと1時間、ようやく順番がやってきた。必要な書類・写真を出し、指紋を機械で採取されたりして、ついにビザがもらえることに。

しかし!しかしである。貰えるのは非運にもカードタイプのビザだった。「スイスとか色々な国に行くから、今ビザを発給してほしい」と言っても、係のお姉さんは残念そうな顔をして首を

横に振る。変わりにお姉さんは「仮ビザを発行しましょう、それなら大丈夫でしょう。」と言って、月曜日に外国人局に来るよう求めた。

週は明けて月曜日、再び外国人局に行って受付で「ドイツを出て旅行するための仮ビザをもらいに来た」と言うと、受付のおじさんは「仮ビザ貰っちゃうと、国外に出られなくなるよ」などと言ってきた。(何を言ってるんだこいつは…)と思いながら、先週のお姉さんとの話をすると「そいつは多分、何も知らないんだろうな」とのたもってきた(※当時の焦りを表現するため、あえて間違った表現を使っています)ので、事務所内の連携の皆無ぶりに笑いながら、結局何も貰うことなく家に帰ってしまった。仕方がないので旅行にはビザの手続きの際に貰った、滞在許可の期限などが書かれている公文書を持って行くことにした。滞在許可の期限は旅行の日程に全て含まれているから、書類さえ持っていれば問題ないだろう、というわけだ。他人事のような呑気さと拭えない不安を抱えた筆者をよそに、時は無慈悲に進んでいく…。

[次話予告] …ビザをその場で貰えなかったことにより、夢と浪漫の他に逮捕・強制送還のスリルが加わった今回の旅。無事国境を越える事は出来るのか、緊張しまくりな筆者と友人を乗せた列車は一路スイスへと向かう。しかし、その先には厳しくつらい現実が待ち受けているのだった。

ネヒステマール
Nächste Mal(ドイツ語で次回)、【東南欧 26 泊 28 日の旅：スイス編第 1 話～まさか、旅立ちの日に～】

次回は【薔薇の月曜日にカーニバル見に行ったら荒廃の世すぎて楽しい】、【東南欧 26 泊 28 日の旅：チューリヒ編第 1 話～まさか、旅立ちの日に～】、について書いていこうかと思います。来月は勉学の状況で書くことがあまり無いと思われるので、生活の状況のテーマ数を増やすかもしれません。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/03/1 ～2018/03/31)

※^{アハトゥン}Achtung!(注意!)：本報告書はドイツ・デュッセルドルフ大学からのものですが、今月の報告書は諸般の都合により、そのほとんどがスイスに関するものです。デュッセルドルフについてのテーマを読みたいという読者様には申し訳ございませんが、何せデュッセルドルフに1ヶ月ほど滞在しておりませんでしたので、温めていたネタを全て出してしまおうと、再来月以降書く事が無くなってしまふのです。[デュッセルドルフ大学からの報告書] という体裁を守るためにも、デュッセルドルフについてのテーマを減らすという私の決断を、どうかご理解くださいますようお願い致します。

1. 勉学の状況

あまり書くこともないので今月もお休み。

2. 生活の状況

【薔薇の月曜日にカーニバル見に行ったら荒廃の世すぎて楽しい】

ケルン・デュッセルドルフなどのドイツ西部では2月の第2週から第3週にかけてカーニバルが行われる。2018年は2月8日～2月14日まで行われ、老若男女が仮装をして街に出て、酒を飲む・踊る・パレードを見学する・女性は男性のネクタイを切る(!)など、普段の安全なデュッセルドルフなど見る影も無い、まさに「荒廃の世」という言葉が相応しい社会になる。私はこの期間中、デュッセルドルフとケルンへと出かけてそれぞれの街の様子を観察してみた。

カーニバル初日、まずはデュッセルドルフの^{アルトシュタット}Altstadtに行き、カーニバルが如何様なものなのかを見物することに。現地に到着した私は開いた口がふさがらなくなる。観光客と地元民の話し声で賑やかなあのAltstadtの通りにディスコミュージックがガンガン流れ、通りを埋め尽くす人々が踊り狂っていた！社交ダンスなんかと違い、型も何も無く、皆メチャクチャに踊っている。(だが、それでいい。それでこそカーニバルなのだ!) まるでそう訴えてくるかのように、心から楽しそうに動き回っている。

広場に出ると仮装した人々がビールを飲み、友と戯れながら騒いでいる。(人々といっても一部ではない。大多数が仮装しているので、仮装せずに行った人の方が逆に浮いてしまうくらいだ。) まあ、何せ1年に数回の、公然と騒ぐ事が許された日なのだ。浮かれて当然といえば当然である。しかし物には限度があるというのはどの世界でも共通のようで、酒に吞まれていきすぎたお戯れをした人が、時々警官隊に取り押さえられる場面が目撃された。ある意味、警官にとってはテロ警戒よりも辛いのでは無いだろうか。騒いでいい日なのに理性的に職務を全うしなけれ

ばならないのだから。そんなどうしようもないことを感じた日であった。

翌週の『^{ローゼンモンターク}薔薇の月曜日』、この日はパレードが行われるのでケルンに行くことにした。ドイツに来るまで知らなかったが、ケルンのカーニバルは結構有名らしく、毎年 100 万人の観光客が訪れる大きなイベントなのだそうだ。そんな楽しそうなイベントに行かないという手は無いだろう。ということで昼下がり、ケルン中央駅を降りると、人間の帯が大通りの両脇に延々と続いていた。何が起きているのかよく分からないのでケルン大聖堂に続く階段を登って振り返ると、馬車に引かれた巨大な山車に乗った道化者が笑顔でお菓子を振りまき、音楽隊が軽快な音楽を奏で、チアリーディングのような格好をした女性たちが、息の合ったダンスで華を添える。それに加えて、どこにいるか分からない司会者が、続々と来る山車を紹介しながら時々「ローゼンモンターク！」と声を張り上げると、それに続いてオーディエンスが「アラーフ！」と答え、ますます盛り上がっていく。舞い落ちるお菓子・それを掴もうと手を伸ばす老若男女・しがらみも何も無い、純粹で真っ直ぐな笑顔、子供の頃になんとかなく夢想した、他人のことなんか考えなくても皆が幸せな、甘い甘い夢のひとつがこの世に現れたかのようであった。

しばらくパレードを見物し、飛んできたお菓子もそこそこ拾ってホクホク気分な帰路の中で、同時にあることについて考えていた。帯を成してパレードを見物する人々の傍で、ビール瓶やゴミを漁っている浮浪者の姿をちらほら見かけたのだ。果たして彼らはパレード自体を、あるいはパレードの日をどういう思いで過ごしているのだろうか。浮かれた人々が捨てていく、いつもより多い稼ぎのタネにありがたい思いでいるのだろうか、それとも甘い夢さえ見れずに、黙々と日々の糧をもらいに行く自分に、惨めさや悲しさを感じているのだろうか。(これは相当に失礼で自分を上に持ち上げた考えであるが、その当時筆者が感じたことをそのまま書いた物であり、自分なりに己の不遜さを理解しているつもりである。) パレードの期間は甘さが目立つ分、少し視点をずらすと苦さもまた濃く深く感じられる。自分がその現状に対してどうすべきなのか、どうしたいのかも分からないまま、現実の家路を私は歩むのだった。(この報告書を読んでいる賢明な読者諸君には、パレードを見に行く時はこんなことを考えたりせず、どうか純粹に楽しさに溺れていただきたい。)

【東南欧 26 泊 28 日の旅：チューリヒ編第 1 話～まさか、旅立ちの日に～】

2月28日23時8分、ヨーロッパでも稀な大寒波が襲来していたとき、2人の男はデュッセルドルフ中央駅にいた。これから始まる旅にワクワクしながらも、初日で国境を超えられず強制送還されるかも(その理由は前話参照)、というドキドキも混ざって、なんとも形容しがたい気持ちでいた。飲料などの買い物を済ませいよいよホームへ。

列車が来るのを待っていると、「新聞いらんかい？」と身なりが綺麗でないおっちゃんが話しかけてきた。筆者たちは「いらん」と素っ気なく答えると、おっちゃんはスッと離れていった。寒さに耐えきれなくなったのか、友人が持っていたトートバッグから帽子を取り出そうとして手が止まった。「あれ、帽子がない…。」けれども探しに行く時間も無く、特段高い帽子という

わけでもなかったの、仕方がないと諦めようと決断した。その時、新聞売りのおっちゃんが我々の前を再び通り過ぎると、友人は目を見開いてポツリと一言、「あの帽子、俺のやつやん…。」そう、話しかけてきたあの時、おっちゃんは気づかれることなく友人のトートバックから帽子をスっていたのだ！イタリアでのスリを警戒していた我々は、まさか住み慣れたデュッセルドルフでスられるとは思っておらず、開始わずか 20 分で起こったこの悲劇に為す術もなく、お互い顔を見合わせて笑いながらも、寒さと怖さで身体は恐々諤々と震えていたのだった。23 時 46 分、EC170 号は 10 分の遅れで出発。闇を切り裂きながら一路スイスへ向かう。

午前 2 時を過ぎたあたりだろうか、ウトウトしていた私は友人に起こされた。傍らには無表情の車掌さん。ついにやってきたドキドキの国境越え検札の時間である。まずは列車のチケットを差し出す。これは当然問題なく帰ってきた。チケットを受け取り、(さあ、いよいよパスポートチェックや、何としても切り抜けたる！) 大学入試以来の覚悟と緊張感で身構えていた私。いざパスポートを取り出そうとしたその時！「ありがとう。」と言い残して車掌は離れていった。なんとパスポートチェックをしなかったのだ。(えらく信用されたもんなあ…)と拍子抜けしたのだが、よくよく考えれば、仮にチェックされたとしても問題はなかった。スイスは永世中立国なので、EU にもシェンゲン協定にも加盟しておらず、入国に差し障りはなかったのだから。

不必要だった緊張感から解かれ、眠りという長いトンネルを抜けると雪国だった。どうやら終着のひとつ前の駅のような。降りる準備を済ませているうちに、EC170 号はスイス北部の玄関都市・バーゼルに到着した。デュッセルドルフから 7 時間、我々はいよいよスイスの地を踏みしめた。第 1 歩目は異国の地に来た感慨にふけていたのだが、第 3 歩目にはそんな感情は消し飛んでしまった。その日の天気は雪、大寒波の影響は依然として続いており、尋常ではない寒さなのだ。さっさと列車を乗り換え、目的地のチューリヒへと向かうことにした。

1 時間ほど経ただろうか、我々はチューリヒに降り立った。まず最初にするのは両替。スイスは非ユーロ圏で、スイスフランという独自の通貨を運用している。レートは 1 ユーロ=1.1~1.2 スイスフラン、1 スイスフラン=118 円程度。そこそこの手数料を取られながらも両替を済ませ、大きい荷物をコインロッカーに預けたら駅中探索へ。外に出してあるレストランのメニューを見てわかったのが、やはり物価が異常に高いことだ。曖昧な記憶だが、飲み物とクロワッサンの朝食セットが 900 円程度、稼ぎの無い学生には厳し過ぎる物価水準である。金銭に余裕のない旅行者は『COOP』というスーパーマーケットで食料を買って、食費を抑えられるだろう。特に『COOP』の自社ブランド品はかなり値段が安く、それでいてクオリティーは相当高いものであった。ひとしきり見回り、適当なレストランに入って食事を済ませた後、駅舎を出てみると地元民が噴水の前で写真を撮っていた。それもそのはず、流れる水あってこそその噴水が完全に凍りついているのだから。(今日は人間が活動できる日やない)と判断した我々は、その日の観光をスッパリ諦め、早々にホテルにチェックインして翌日以降の観光に備えるのだった。

【東南欧 26 泊 28 日の旅：チューリヒ編第 2 話：～酸いも甘いも高級時計から～】

今回の旅の私的最大の目標であり、高校生の時から憧れていたことに『スイスブランドの良質な

腕時計を持つ』がある。カッコイイ大人は良い装飾品(これは決して値段が高いもの、という意味ではない)を身に付けるもの、(今はまだまだ遠くても、いつかはその時計に相応しい大人になる)というモチベーションと目標を得る為、それに(タックスフリーで安く買えるし、本場で買うなら今しかない)という下心も加わり、今回の旅で購入することを決断した。

チューリヒ滞在中のある日のお昼過ぎ、駅前通りを訪れてみると流石スイス、多くの時計屋が軒を連ねている。事前に目星を付けていたお店を訪れショーケースを眺めてみると、気になるブランドの時計がいくつかあったが、お店に入ることに緊張してしまい中々入れない。何せ大金を使ったのなんて、免許合宿費用の支払いくらいなものなので、どうしても力が入ってしまう。結局7、8分かかって思い切って入店。店員さんにブランドをいくつか言ってカタログを持ってきてもらい、その中から自分の好みにあった商品を見せてもらった。

試しに装着してみた私は困惑してしまった。カタログで見た時の印象と、実際に腕に付けた時の印象がかなり異なるのだ。私に担当して下さった店員さん曰く、「机に置いた時と腕に付けた時とでは、表情がまるで違ってくるのです。ですから、事前にお気に入りの時計があったとしても、是非一度は試着してみてください。」とのこと。その方は青二才の我々にも非常に丁寧に対応してくださり、私に似合いそうな時計を次々と持って来てくださった。そこからいくつか購入候補を選んで、「他の店でも見てみたい」と言って一旦離れた。これは本音半分、少し落ち着く時間が欲しかったのが半分であった。

その後、外観が気になるお店にいくつか入ってみたのだが、いずれのお店も扱っている平均価格帯が高く、(自分にはまだ早いなあ)と痛感させられた。学生のくせに生意気なことをしている、とお思いの読者もいるかもしれないが、このようなアクション自体が、学校では習えない非常に良い経験であり、大人になるまでに必要な勉強だと私は思う。各ブランドが持つ格調高さと重みを知れる上、その重みを自分が背負っていけるかどうかを判断する、『自分の人生に対する自己評価』を確認できるまたとない機会であるからだ。結局、目星を付けていたお店に戻り、さらに購入候補を絞り込んでいくこととなった。その後さらに商品を持って来てもらったり、お客さんで来ていたナイスミドルなおじ様にも意見を聞いたりして、遂にお気に入りの一本を見つけた。(これからこの時計が止まるか、自分の心臓が止まるまで、大切に身に付けていくんだ)と思うと、表情筋が上手く働かず、もうニヤニヤが止まらない。間違いなく生涯記憶に残る買い物となった。

そして購入手続きを進めていき、初体験となるタックスフリーの申請を行った。クレジットカードで支払う場合、①一旦本体価格と消費税が仮引き落としされ、②空港や国境にある駅などの税関で買った商品の現物を提示し、必要な書類を提出して認可された後、③許可証の入った手紙をお店に送ることで、④消費税分の引き落としがキャンセルされる、という仕組みである。必要書類に記入した後、税関提出用の書類を貰ってお店を後にした。(応対して下さった店員さん、本当にお世話になりました。)

ホテルに戻り友人と相談した結果、ミラノへの移動日に税関に行くのは面倒だという結論に至り、翌日空港に行って申請することにした。一生モノの買い物に満足いくまで時間をかけ、お気

に入りの時計を見つけられた喜びに満ち満ちていた私は、(タックスフリーの申請なんてお安い御用だ!)なんて思いながら、ホテルでローストチキンを頼張るのだった。翌日空港であんなことになるなんて、つゆほども知らずに……。

[次回予告]…買ったばかり時計を付け、誇り高き勇者のような気持ちで税関に向かう筆者。しかし税関職員が放った一言によって、その場は敵と対峙したかのような緊張感に包まれる。両者が睨み合う中、税関職員が召喚した“第三勢力”によって状況はさらに混迷を極めていく。果たしてこの門をくぐり抜けることは出来るのか。^{ネヒステマール}Nächste Mal、【東南欧26泊28日の旅：チューリヒ編最終話～実録ドキュメント、スイス税関で水際の攻防～】

今回は【景品は家一棟、1万ユーロ!? ドイツのマクドナルドでモノポリー試してみた】、【東南欧26泊28日の旅：チューリヒ編外伝：～侯爵が統べる、あの国へ～】、【東南欧26泊28日の旅：チューリヒ編最終話～実録ドキュメント、スイス税関で水際の攻防～】について書いていこうかと思えます。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/04/1 ～2017/04/30)

1. 勉学の状況

4月に入り、デュッセルドルフ大学の新しいセメスターが始まった。今学期に私が取る授業は以下のとおりである。①Deutschkurs ②Einkommen, Beschäftigung und Preisniveau ③Democracy in the European Union、①は週3回のドイツ語集中コース、②はEUの視点から見たマクロ経済学、③はEUにおける民主主義の現状を通して、今後のヨーロッパ統合に必要な民主主義とは何かを考えていく講義。いずれも個人的には興味深い講義なので、挑戦していこうと思う。

2. 生活の状況

【景品は家一棟、1万ユーロ！？ドイツのマクドナルドでモノポリー試してみた】

飲み屋でビールを飲みながら談笑していると、無性にお腹が空いてくることがある。そんな時は友人達と一緒に鶏肉を炙ってパンで挟んだものか、マクドナルドに行って何か頼むのがお決まりになっている。ある日、マクドナルドに行くと、万国旗のような中刷り広告が吊り下がっているではないか。なんとなく気になったので見てみると、『1名の方に家一棟、当たる！』とか『10名の方に1万ユーロが！』などと書かれていた。1年で日本に帰国するというのに、(家一棟ってええなあ)とすぐに浪漫飛行へ in the sky してしまった私は、表向きはそんなそぶりを見せず、けれども内心は家を貰う気満々で挑戦してみることにした。

今回の景品を貰うためには、「マクドナルドモノポリー」というゲームに参加してクリアする必要がある。対象商品を買うとシールが付いていて、そのシールに書かれている色と番号のエリアを手に入れられる。それを繰り返してゲームを進めていく、という工程のようだ。正直、モノポリーのルールなんて人生で1回聞いたか聞いてないくらいなのでよくわからないのだが、とりあえず、ポテトについていたシールをめくってみた。するとそこには「Jackpot!」の文字が！番号が書かれていたので、後日ネットで申し込んでみると、「おめでとう！」の文字が。(これは幸運の中の幸運なのでは！?)とドキドキしながら下にスクロールすると、「次のステージに進めるよ！」、なんとも明るく絶望的なことを言われたものだ。Jackpot がそうそう当たるとも思えないし、一体いくつのステージをこなせばいいのか不明なので、ここは大人しく諦めておくことにした。「逃げだす」ことは誰にでもできるが、浪漫飛行を続けていると、「資金と時間」という現実が推進力を奪っていつてしまうので、どうか勘弁していただきたい。ちなみに筆者は、「マック」、「マクド」のどちらの略称でも気にしない派である。

【東南欧26泊28日の旅：チューリヒ編外伝～侯爵が続べる、あの国へ～】

スイスフランが使える国、いくつあるか皆さんはご存知だろうか。1つはもちろんスイス、それともう1カ国使える国が実はあるのだ。その名はリヒテンシュタイン公国、公式では世界に3カ国しか存在しない貴族が治める国である。チューリヒから首都のファドゥーツまでは、電車とバスを使って2時間程度、良い機会なので行ってみることにした。

曇り空の昼下がりに、ファドゥーツに到着。まず最初に行くところは観光案内所。ここでは3スイスフラン支払うと、入国を証明する王冠のスタンプを押してくれる。(正直、筆者がリヒテンシュタイン公国に行きたかった理由はパスポートにスタンプを貰いたかっただけ、と言っても過言ではない。)観光案内所ではリヒテンシュタインの国旗とロゴが入った服飾品、絵葉書、記念硬貨などのお土産も売っている。その中でも注目すべきはワイン。リヒテンシュタイン産のワインは他国に輸出を行っていないので、付加価値が非常に高い。今回は長い旅なので、重たいワインの買い物は控えたが、もう一度行く機会があれば是非購入していきたい。

目的を果たしたので市街地を散策してみることにした。そもそもの人口が少なく、時期のせいなのか観光客があまりいなかったのも相まって、山々に囲まれ、品のある灰色の石畳が敷かれた市街地は静寂と落ち着きを人々に与えていた。そんなある意味閑散とした街なのに、高級ブランド店は軒を連ねている。リヒテンシュタインは他国に比べて法人税率が低く、本社を置いてる国際企業が沢山あるので、おそらくお金持ちが沢山住んでいるのだろうから、テナントを出しているのではないだろうか。そんなことを考えながら、ふと上を見上げるとお城の壁らしきものを発見した。そのお城こそリヒテンシュタイン公国を治めるハンス=アダムⅡ世公爵がお住まいのファドゥーツ城である。建国記念日にはお庭が一般公開されるらしいが、今回はそんな素敵な日ではなく、また、寒い中軽い登山をする気は無かったので、今回の訪問は遠慮することにした。しかし城から望む街の眺めはなかなかのもの、という評判なので、時間と体力がある方は行ってみてはいかがだろうか。

帰りのバスが来るまでの間、切手博物館を見学することにした。リヒテンシュタインは世界で1番美しい切手を発行している国として名高く、国の歳入の1割は切手の売り上げ、という恐ろしい国である。切手博物館では、切手の歴史や作り方、過去の型番を公開したりなどしている。土産物も当然切手であり、過去数十年分(確か100年近くあったはず…)の各年の切手も売っていた。古ければ古いほど高い、という訳ではなく、年ごとにまちまちであったのが興味深かった。切手博物館を訪れたら、自分の生まれ年の切手をお土産にする、というのも面白いだろう。

ここまでいくつか紹介してきたが、リヒテンシュタイン公国は規模としては小さいながらも、自国のブランドを巧みに活かして遅くもあり続ける国と言えよう。興味本位の方も、法人税削減の為に会社の本籍地を置きたい方も是非訪れてみてはいかがだろうか。

【東南欧26泊28日の旅:チューリヒ編最終話～実録ドキュメント、スイス税関水際の攻防～】

前々話で時計を購入した筆者(詳細は3月分報告書をチェック!)はその翌日、タックスフリーの申請をする為に友人とチューリヒ空港を訪れた。途中、知り合いに勧められたVictorinoxのマルチツールを免税店で買うなど、寄り道をしながら税関に到着。

筆者たち「タックスフリーの申請をしたいのですが。」(必要書類と時計・日本国のパスポートを提示)

税関職員(以下職員)「日本に帰るのかい？」

筆者たち「いや、次はミラノに行くよ。」

職員「……………君たちシェンゲン協定の日数をオーバーしてるけど、滞在許可取ってるのかな？」
さあ、戦いの始まりだ。友人は滞在許可のカードを持っているのでなんの問題ないが、私は公的書類があるとはいえ、はっきり示せるカードを持っている訳ではない。

筆者たち「取ってるよ。」(友人はカードを、私は書類を差し出す)

職員「……………これは本当に滞在許可が降りているのかい？」(書類を手にして疑ぐり顔)

筆者「ここを見て、ちゃんと有効期間が書いてあるでしょう？」

職員「……………確認するから待ってて。」

それからどこかへ電話をする職員、我々はただ良い反応を祈るばかり…。

待つこと20分、ネイビーの制服を着た男女のペアがやって来た。腰には拳銃、背中には“POLIZEI”の文字。そう、国家の治安を維持する組織、警察がやってきたのだ！(いよいよ強制送還が現実にかかるのか)などという筆者の怯えをよそに、そこから小1時間ほど職員と話し合ったり、提示した書類を写真に収めたりした後、警官が我々に話しかけてきた。

警官「君たちはどこから来たの？」

筆者たち「デュッセルドルフです。留学でデュッセルドルフ大学に來ています。学生証があるから証明できますけど見ますか？」

警官「見せて」

提出してからは、またしばらく待たされることになった。何十分経っただろうか、警官が近づいてきたので、こちらから直球で聞いてみることにした。

筆者「何か問題があるんですか？」(唾を飲みながら訊く)

警官「いや、申請は大丈夫だよ。許可しよう。」

筆者たち「(良かった…)」

警官「ただ……………」

筆者「!!!」

警官「次はミラノに行くんだらう？もしそこで警察にパスポートをチェックされたら捕まって日本に送り返されるかもしれないよ。」

この時私は何も感じず、ただ顔面通りに受け止めたただけだったが、友人が後に言った言葉は今でもよく覚えている。「スイス警察なのに、旅行者がイタリアで捕まる可能性を考慮してくれるなんてすごく優しいね。」

結局タックスフリーの申請は、時間こそ2時間かかったものの無事に終わった。そしてチューリヒから移動する日、出発を待つミラノ行き特急列車の狭い座席に腰掛けて、私は滞在した5日間を振り返っていた。外出する気が失せる寒さ、美味しい食事、時計選びのひとつ、税関でのせめぎ合い。いざ離れるとなると、全てが素晴らしい思い出となって満足感が行き渡る。(次

はどんな体験が待っているのだろうか)、揺れ動いた列車とともに、私の気持ちも次へと加速していく…。

[次回予告]…ドイツ語はもちろん、英語も使える人が少ない国で戸惑いを隠せない筆者たち。そんな弱者の匂いを嗅ぎつけて、優しさを売り物にする“奴ら”がすり寄ってくる。真を見抜く力が試されるイタリアに果敢に挑む1週間！^{ネヒステマール}Nächste Mal、【東南欧26泊28日の旅：ミラノ前編～鳩を操りし者～】

次回は【あのナイトミュージアムは実在した！？春の夜に“Nacht der Museen”行ってみた】、【東南欧26泊28日の旅：ミラノ前編～鳩を操りし者～】について書いていこうかと思えます。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/05/01 ～2018/05/31)

1. 勉学の状況

前学期と違い、Deutschkurs は週 3 回に増えたので習う分量も相応に増える。文法事項だけで今月までに、形容詞、比較級・最上級、理由(weil)・目的語を表す複文の作り方、3格・4格の代名詞、形容詞の弱変化、序数詞を習った。また、教科書のトピックごとに覚えていかなければならない単語も多い。Einkommen, Beschäftigung und Preisniveau では、IS-LM 曲線を構成する要素と均衡点の求め方、フィiscalポリシーやマネタリーポリシーでの均衡点の変化、コブ・ダグラス生産関数などを扱った。Democracy in the European Union では、民主主義とは何かから始まり、ヨーロッパ連合での現在の問題点として挙げられている Democratic deficit(民主主義の赤字)について触れられた。民主主義の赤字とは、EU の政策は欧州委員会に参加する加盟各国代表によって決められているので、加盟国の人民の意思との乖離があるのではないか、ということを表している。しかし、加盟国の人民はそもそも EU の民であるという意識は強く持っていないので、一概に直接選挙制度を導入すればいいわけでもない、ということだとか。EU という組織についてなんとなく存在は知っていたが、民主主義の側面で問題を抱えているとは想像もしていなかったので新鮮な授業だった。

2. 生活の状況

【あのナイトミュージアムは実在した！？春の夜に"Nacht der Museen"行ってみた】

4月第2週の土曜の夜、普段なら人を追い払う時間の美術館・博物館の前には多くの人が並んでいた。今宵は1年に1回だけ、夜の美術館に入館できる"Nacht der Museen"の日。駅や観光案内所で売っている共通チケットを買えば、その一晩に限り、好きなだけ美術館や博物館に入っても良いのだ。あまり映画は見ないが、金曜ロードショーで「ナイトミュージアム」を見たことのある筆者は、(きっとあの映画のような冒険じみたスペクタクルがあるに違いない)、などと大学4年生とは思えない妄想を広げながら、入館までの退屈凌ぎをしていた。

最初に入ったのはK20州立美術館。パブロ・ピカソ、アンディ・ウォーホル、マックス・エルンストなどの近・現代絵画作品が数多く展示されている。展示されている作品にも目が行くが、それよりも私が驚いたのは、人の多さである。芸術に興味を持っている人がこんなにいるとは思ってもいなかったのである。欧州人は外見から年齢層を判別するのが難しいが、20代からお年寄りまで幅広く観覧していたので、どうやら住民と ^{Kunst} Kunst(芸術)の親和性は高いようである。

作品をひとしきり堪能したところで、私は次の目的地を目指しバス停へと向った。"Nacht der Museen"では、3ルートの巡回バスが10～15分間隔で運転されているので、移動は比較的簡

単である。しかし、どうにも私は乗るバスを間違えたらしく、(この先どうしようか)と揺られながら迷っていたところに、軽快な音楽が耳に流れてきた。寄る辺無き私は、まさしくローレライの歌声のように、その場へと引き寄せられて行くのだった。

降り立った場所は陶器博物館。世界各地の陶器類の展示を行っている。しかし今日は単に展示場を開くのではなく、気鋭のバンドが演奏していたのだ。簡易なテーブルとイスは人で埋まり、ビールやワインを片手に聴き入っている。私も別館で販売されていた軽食を片手に、五感で刺激と喜びを頂く。久しく感じていなかったこれらのパルスは、有限の時間を縮めていく…。

午前1時、私はベッドへと倒れこんだ。これまで書いた2箇所以外にもゴスペルライブに第二次世界大戦で使われた防空壕なども拝見し、その日はどうやらよく眠れたようであった。私が訪れることの出来なかった場所がまだまだ沢山あるので、4月にデュッセルドルフを訪れる際は、是非お好みのプランを立てて“Nacht der Mussen”に参加してみたいだろうか。

【東南欧26泊28日の旅：ミラノ前編～鳩を操りし者～】

3月6日、昼下がりのミラノ中央駅で筆者は戸惑っていた。駅のデザインとは思えない、壁中に広がる美しい彫刻の数々に感嘆の息を漏らしたのもさることながら、ホテルへの行き方がよくわかっていない、という単純明快な問題があったのだ。恐る恐る銃で武装している軍の人にホテル周辺の地図を見せて行き方を訪ねてみたものの、英語があまり使えないようで有益な情報が得られない。その後なんとか行き方がわかった我々は、メトロの自販機でチケットを買おうと画面を操作していると、「どこまで行くの？」と親切なおばさんが話しかけてきたので、その人と一緒にチケットを買おうとすると、友人とメトロの職員から同時に「そいつの話を聞くな！！」と総ツッコミを喰らった。その瞬間、(ああ、これが噂に聞く奴らか…)などと呑気に思ったのだった。奴らは少々の知識やサービスと引き換えに暴利的な金銭を要求してくる。その時は難を逃れ、その後何事もなくホテルにたどり着いたのだが、奴らとの邂逅はこの一度きりではなかった。

翌日だったか、翌々日だったか、筆者と友人はドゥオモの前にいた。その日は天気も良く、イタリアの穏やかさを感じながら観光していた。清潔感のある単純な配色とドゥオモの神秘性を見せるための細かなディテールとが、一種のアンビバレンスと言える雰囲気を感じていた。その雰囲気に徐々に飲まれながらフラフラと近づいていると、急に男が握りこぶしを目の前に出してきた。なぜだかわからないが反射的に手を差し出してしまった筆者。手の平に落とされたのは、炒ったトウモロコシ。すると、男は(片手を上にあげるように)というジェスチャーをするので挙げてみると、大量の鳩が手や腕の周りにエサを求めて集まってきた！その様子を写真に収めるように友人に支持する男。わけがわからぬまま写真を取り終わると「はい、じゃあ50ユーロね」と言われてしまった。そこで筆者は、アホのフリをして50セント硬貨を差し出してみた。「違う違う、50ユーロだ」と男は言うので「からかうなよ。金を貰えるだけありがたいと思ってくれ。」と言って離れていった。まったく、落ち着きのない街である。しかし、知識としてはこれらのようなボッタクリがいるのは知っていたが、まさか鳩を使ってまでぼったくってくるとは思ってもみなかった。皆さんもイタリアに行った際はお気をつけいただきたい。

【東南欧 26 泊 28 日の旅: ミラノ後編~本場の味は違うって本当?人気のピッツェリアを調査~】

イタリアとピッツァ、互いに互いを連想させる言葉としてこれほど有名なものもないだろう。それほどにイタリアでは馴染みのある料理なのである。そしてイタリアを旅した者は口を揃えてこう言うのだ、「本場の味は違う」と。私はその言葉に半信半疑でいた。いわゆる“脳内補正”というやつで、そこそこ美味しいピザを“本場の味”というバイアスが“絶品”という認識にすり替えているのではないか、それすなわち「本場の味は違う」とは“格の違い”ではなく“予想・期待との違い”ではないかと考えていた。イタリアに滞在しているならば、この疑いの真偽を確認しないわけにはいかないだろう。というわけでネット検索をかけて、ミラノで人気のピッツェリアに行ってみることにした。

メインストリートの端の交差点を右に曲がると、右手に柔らかな光を外にたたえる店が現れる。覗いてみると、十人以上が順番待ちをしていた。入口をくぐると、エントランスホールとピザ生地を作る作業場があった。老若男女色々な年代の人達がテーブルにつき、楽しそうに食事をしている。スタッフも紳士的な対応で我々にしばらく待つよう促し、順番が来ると席まで案内してくれた。さて、何を頼むべきなのか。(シンプルな料理ほど、料理人の力量がハッキリとわかる)と料理の鉄人で服部先生が言っていたので、私はピザの王道マルゲリータとドルチェ(デザート)にティラミス、飲み物は水を注文することにした。

待つこと 12 分、ついに本場のピッツァとご対面。薄い生地にポモドーロソースを広げ、モッツァレラチーズとバジリコで飾られた、配色的にもまさにイタリア代表だと言わんばかりのピッツァである。いざ実食。一口がぶりと頬張ると「……美味え、これは美味えわ」、わずか 3 秒で疑いは晴れた。ピッツァ生地にはほのかな塩気、モッツァレラチーズはクセがなく、それでいて濃厚な味わいで、トマトの酸味と加熱されたことによって生まれる太陽のような甘みをバジリコが繋ぎつつ、その特有の香りでさらに完成度を高めている。ヨーロッパに来てからというもの、日本でいう洋食で絶品と感じたのはこれが初めてであった。あっさりとしたらげってしまったものの、満腹感もちょうど良く感じられる量で、この点もポイントは高い。ドルチェも十分なクオリティだったので、悪く言うところが特に無い。というわけで調査結果は【本場の味はやっぱり格が違う】、と締めたいところなのだが、ここまで私が書いてきたのは完全に主観で見て味わったものであり、一切の客観性がないので、鵜呑みにせずにあくまで参考程度に見ていただきたい。

[次回予告]…ヴェネチア行き特急の出発時間 30 分前に着くような列車に乗るはずが、27 分遅延したせいで、ミラノ中央駅の階段を大きいキャリーケースを振り回しながら全力で駆け上がる筆者たち。車内で乱れた息を整えているうちに眠ってしまった筆者が目を覚ますと、そこはすでに

アドリアの女王が領土の中だった…。^{ネヒステマール}Nächste Mal、【東南欧 26 泊 28 日の旅：ヴェネチア編~真珠の迷宮~】

次回は【Japan Tag～日本で見るより美しい空の華～】、【東南欧26泊28日の旅：ヴェネチア編～真珠の迷宮～】について書いていこうかと思います。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/06/01 ～2018/06/30)

1. 勉学の状況

Deutschkurs は、文法事項としては形容詞の格変化・再帰動詞などを行い、テーマとしては旅行や衣服に関するものを扱った。Einkommen, Beschäftigung und Preisniveau では、労働市場において、見かけの賃金が柔軟(市場の需要と供給に合わせて賃金を変えることができる)な場合と硬直している場合の状況下で、様々な変数(賃金・資本など)が変化した時に均衡点はどのような過程で変化するのか、どのような結果になるのかを理解し、最後に労働市場と生産関数を組み合わせたものがどのような関数を取るのかを講義された。Democracy in the European Union では、EU 市民である自己同一性をどのように形成したかについて触れられた。今日の議論で、もはやヨーロッパに住んでいる人民が” EU 市民であるという意識を持っているかどうか” という議題は古い。すでにそれらは EU について情報を発信してきたメディアによって、上昇してきているのである。これからの議題は” どのようにしてこの自己同一性を持ってもらい、割合を上昇させるのか” という段階にきている。

2. 生活の状況

【Japan Tag～日本で見るとより美しい空の華～】

5月26日、この日は1年に1回、日本に関連した催し物がライン川周辺で開かれるJapan Tag。日本の市町村や企業が海外に向けてどんなテーマを、どのような方法でアピールしているのかを調べるため、早速会場に向かった。

会場は主にアルトシュタットあたりのライン川沿いで、自治体は大阪市・福島県・千葉県などが参加し、企業としてはANA・チョーヤ・HISが参加していた。自治体の中で1番面白いと思ったのは福島県だ。福島県はノルトライン・ヴェストファーレン州と再生可能エネルギー産業で提携を結んでいて、フクシマとNRW州との関係性を説明するとともに、福島県自体の魅力をアピールしていて、非常にわかりやすく興味深いブースであった。一方、我々が千葉県のブースは書道・折り紙体験を行なっていたが、旭市とデュッセルドルフの交流については壁に掲載する程度に留まり、ハ

ツキリ言って折角の認知活動の機会を無駄にしているとしか思えなかった。やる気が無いのか、それともやる気の方向性があらぬ方向に向いているのか。せめて千葉への理解を深めてもらうためのイベント(例:福島県のブースでは、景品ありのクイズを行っていた。)をするべきだろう。

企業は各ブースがそれぞれ適した企画を行っていたと個人的には思う。チョーヤは熟成梅酒やサイダー割りの販売、ANAはアンケートに答えた人に麦わら帽子を配り、HISは豪華景品付きクイズを行っていた。その他個人が出店しているブースでは、マンガ・フィギュアの販売、演舞の披露、着物や簪・根付の特売などを行い、様々な方面から日本文化をアピールして盛り上がっていた。

そして夜になると、ライン川で日本の花火が打ち上がる。花火を見に行くのは何年ぶりだろうか。夏の風物詩ではあるが、有名な大会は人が多く混雑しているし、その上蒸し暑いので見に行くのが嫌だったのだ。しかしデュッセルドルフは5月の下旬なので、比較的涼しく湿気も無いし、その上場所を選べばそこまでの密集度ではないので、不快感なく見る事が出来る。そんな好条件の中、久しぶりにこの目で見た花火はやはり美しく、ライン川の水面と人々のまなこを輝かせたのだった…。

【東南欧26泊28日の旅：ヴェネチア編～真珠の迷宮～】

まぶたを上げると、“麗”が現れた。淡いセルリアンブルーのアドリア海に、リモンチェッロでできたかのような家々。どこか穏やかで、やわらかな風景ながら、これまでに見たことのないそのシーンは、閃光のように海馬に入り込む。海に渡るレンガの橋を超え、列車は終着ヴェネチア・サンタ・ルシア駅に入った。

ヴェネチアで驚くべきことの1つは、車道の代わりに水路が走っていることだ。それゆえ自動車が走っていることは基本的に無く、人々の移動手段は徒歩か、「ヴァポレット」と呼ばれる水上バスである。早速ヴァポレットに乗って、今回泊まるユースホステルに向かった。ヴェネチアは冬でも人気の観光地のように、宿泊料は他の都市と比べて高いので、お金の余裕が無い方は早めに予約するか、Air BNBやカウチサーフィンなどのサイトを利用して費用を節約しよう。ただし費用が安い分、相応のリスクがあることは承知しておいてほしい。ホステルに荷物を置いて、早速ヴェネチ

ア探索へ。時刻はすでに 17 時半、黄昏時の太陽は建物に影を落とし、夜の訪れを映し出す。夜の散歩も楽しそうだが、勝手にわからない初日から行うのは少々リスクが高いので、サン・マルコ広場のあたりを適当に見てまわって、適当なレストランで晩御飯を済ませて帰ることにした。

日が沈みかけていたのもあって、広場にはそれほど多くの観光客もおらず、じっくりと眺めることができた。広場の周りには高級ブティックやオリジナルブランドの革製品、お土産物を売るお店が軒を連ね、狭い通りは賑やかだった。ひとしきり歩き回って満足したところでレストランを探し始めたのだが…おかしい、見覚えのある場所に戻ってこれない。はて、反対の道だったろうかと逆に行くも、その先もまた見覚えがない。地図を見てなんとか自分の現在位置を把握して広場に戻るように進んでいるはずなのに、なかなか開けた場所が現れない。(これは、迷子ってやつやないか…)、暮れゆく空が焦燥感に拍車をかける。どうにも困ってしまったが、偶然一軒のレストランを発見したので、落ち着きを得るために入ることにした。

ゆっくりと食事をし、安堵感と落ち着きを取り戻したら、サン・マルコ広場を目指して歩き始める。すると不思議なことにあっさりと戻れてしまった。これは私だけかもしれないが、ヴェネチアは小路が複雑に絡み合っていて、方向感覚が狂って道に迷ってしまうことがしばしばあるのだ。別の日も目当てのレストランを探して 2 時間以上歩き回った挙句、全く違うところにたどり着いたりしたが、自分がどこから道に迷い始めたのかわからないので、解決のしようがないのである。(筆者が方向音痴なだけでは…)とお思いの方が大半だと思うが、それを加味しても『アドリア海の真珠』と称されるヴェネチアは、まさに『真珠の迷宮』とでもいうべき街でもあった。

【東南欧 26 泊 28 日の旅：短編～日本で乗車不可能！？寝台列車乗車記～】

なぜ、この旅は「26 泊 28 日」なのか。車中泊という答えには容易に至りそうだが、寝台列車に乗るという想像ができた人は少ないのでは、と私は思っている。かつてはブルートレインなどが日本各地へ向けて走っていたのだが、新幹線の登場と発展とともに衰退。現在では、日本で通常運行している寝台列車は「サンライズ瀬戸・出雲号」だけで、ノビノビシート以外は全席個室というものである。これはすなわち、ブルートレインの代名詞ともいえる三段ベッドの客車には今では乗れないということであ

る。一方ヨーロッパでは、現在でも夜間に特急電車が走り、寝台列車も各地で運用されている。座席の種類も普通のシートから三段ベッド・個室まで様々あり、幼少期から鉄道が好きな筆者としては貴重な体験ができる好機なのであった。

今回乗るのは、ローマからウィーンを結ぶÖBB(オーストリア国鉄)の寝台列車。もちろん個室を取るほどの余裕は無いので、三段ベット・6人一室の席を指定した。座席指定料金は確か34ユーロだったはずである。ちなみに、ÖBBではなんと朝食がサービスで提供されるので、「移動しながら寝られる、風呂なしの hostel(朝食つき)」と考えれば34ユーロはお値打ちだと思う。

3月13日20時30分、寝つきを良くするためにホテルのバーで“ゴットファーザー”というカクテルを飲んだら、半分もしないうちに酔っ払って晩御飯を全て吐き出しフラフラな筆者が、いよいよ寝台列車に乗り込む。今夜の寝床は、三段ベッドの一番上。ラゲージスペースが無いので、客室上部の空いた場所にスーツケースを無理矢理放り込む。第一印象は「窮屈」だった。縦・横幅は寝るのに十分なスペースがあるのだが、ベッドと天井までが低いので上体を起こした時の圧迫感が凄いのである。なんとか寝巻きに替えて横になると、思いの外心地は良い。当然クッションやスプリングは無いのだが、疲れた時の、電車で揺られて気持ちよく寝落ちしてしまう感覚を、身体を横に出来ることによって全身で感じられる、といったようなものだろうか。ただ、カーブを曲がった時に胃袋が上下どちらかに引っ張られる感じはなんとも気持ちが悪く、なれるまで少し時間がかかった。

翌朝、ドアをノックする音で目が覚めた。車掌さんが朝食を持ってきてくれたのだ。朝食の内容は、パンが2個にジャムとバター、飲み物にコーヒーか紅茶であった。簡素ではあったが、なんだか美味しかったと記憶している。のんびり着替えて、残ったコーヒーを飲みながらボーッと車窓を眺め、朝7時55分、列車はウィーン中央駅に到着。高さの問題こそあったものの、想像以上に快適だったので、かなりスッキリした状態でホームに降り立つことが出来た。しかし、ここはまだ中継地にすぎない。我々は目的地であるブタペストを目指し、次の列車を確認するためにホームを後にするのだった…。

[次回予告]…初めて聞くハンガリー語、初めて使うフォリント、経済発展を感じさせない古く脆そうな建物、あらゆる方向から不安になってくる国、

ハンガリー。だが、対照的に国民は来たるべきその日に備えて着々と準備を進め、盛り上がりの気を高めていた。Nächste Mal、【東南欧 26 泊 28 日の旅：ブダペスト前編～1848年革命と自由戦争記念日～】

今回は【ハウスパーティーにお呼ばれされました】、【東南欧 26 泊 28 日の旅：ブダペスト前編～1848年革命と自由戦争記念日～】について書いていこうかと思えます。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/07/01 ～2018/07/31)

1. 勉学の状況

Deutschkurs では、3格・4格での定冠詞・不定冠詞と形容詞の語尾の変化や、“ob”（～かどうか）を使った複文での質問の仕方などを教わった。Einkommen, Beschäftigung und Preisniveau では、これまで習った3つの市場を全て組み合わせて、賃金が自由に变化できる場合と、変化が硬直している場合に、それぞれの市場にある変数が変化すると、他の市場にどのような影響があるのか、について講義された。Democracy in the European Union の講義は、別の用事によってほとんど参加できなかったので、ここでの報告は差し控えさせていただく。

2. 生活の状況

【ハウスパーティーにお呼ばれされました】

これは大分と前の話なのだが、飲み屋で知り合った初対面の男から、ハウスパーティーに誘われた。突然誘われたことに対する驚き、なんか怪しいんじゃないかという恐れと、人生初のハウスパーティーなるものに行ける喜びで訳がわからない顔になりながらお誘いを受けた。

ドイツだけかどうかは不明だが、ハウスパーティーに行く際には1つルールがある。それは必ず開始時間より遅れていく、ということだ。日本だと開始5分とか10分前に行くのが無難だったと思う(正直忘れてしまった)が、ドイツでそれはタブーである。何故なら、「まだ準備している時間だから」。当たり前っちゃ当たり前のことである。そこで私と友人はきっちり開始時間より遅れて行って、会場である男の家に着いた。今回はおせんべい、か〇ピー、き〇この山、たけ〇この里を差し入れると、結構興味深そうに見てもらえた。後で食べた感想を聞いてみると、どうやらおせんべいを気に入ったらしく、「旨味を凄い感じられて美味しい！」とのこと。お気に召してもらえてよかった。

後は初めて会った人に挨拶したり、一緒にゲームをしたり、歌っては酒を飲み、踊っては酒を飲む、をひたすらやっていた。あんなに五月蠅くしていたのに、ご近所さんから何も苦情が来ないあたり、どうやら恵まれた環境に住んでいるようである。そしてなんだかんだで朝4時、フラフラし

ながら別れを惜しみ、ケラケラ笑いながら友人達と家に帰った。あんなに酒を飲んだのは人生で初めてであったし、今後もそう飲むことはないだろう。そして家に帰るやいなや、ベットに倒れて眠りこける、なんてことはせず、1泊2日ニュルンベルク某マーケット探訪のための準備をして、2時間後には家を出発したのだった。移動中は、脳が波打つようにグラグラ動いている感覚で滅茶苦茶気持ち悪かったので、若いからといって飲み過ぎた後に旅行するのは絶対にやめましょう。

【東南欧26泊28日の旅: ブダペスト前編～1848年革命と自由戦争記念日～】

3月14日、ウィーンHbfから2時間半かけて我々はブダペスト・ケレティ駅に降り立った。降り立った瞬間、口にこそ出さなかったものの、頭のなかで「旧っ！」と叫んでしまった。京都を古都と呼ぶような美しさなんて欠片もなく、ただただ時の流れによって朽ち果てたかのようなおんぼろさだった。(特急に乗っている間にタイムスリップでもしたんじゃないのか)と錯覚しそうになる。その割に日曜日もやっているコンビニがあるんだから、なんとも不思議な国である。

そんな駅から地下鉄に乗り、今回泊まるホステルに到着。ヴェネツィアとは対照的に、ブダペストはほとんどのモノ・サービスの価格が安く、ホステルも1泊10ユーロ程度だった(!)。早速荷物を置いて市内を散策することに。王宮へ行ってみると、広場で何やら舞台の設営が行われていて、歩いているハンガリー人は、胸のあたりに国旗に使われている白・赤・緑の3色で織り成された布のバッチを付けていた。後で友人が調べたところによると、翌3月15日はハンガリー独立記念日、正式名称を「1848年革命と自由戦争記念日」といい、王宮前の広場では現在ハンガリー議会で与党の政党がイベントを開くらしい。更にその翌日の3月16日は、王宮が無料で開放されるという。こんな面白そうな機会を逃すわけにはいかないのだから、16日は王宮に行くことにした。

16日朝、この日はあいにくの雨だったが、王宮前広場に行くと既に長蛇の列ができていた。寒さと雨で全身がかじかむのをなんとか堪えて並ぶこと1時間、ようやく中に入れた。手荷物のX線検査を終えて先に進むと、冬の雨に耐えていた我々を解きほぐすかのように、煌びやかな踊り場が出迎えてくれた。大理石の床・紅の絨毯に、柱や壁の外装はほとんどが金でできており、柔らかな白熱球のシャンデリアがより優美さに輪をかける。そして一際天井が高いホールへ行くと、金をベースに大粒のルビー・エメラルド・ダイヤモンドが散りばめられた王冠や錫杖が展示されていた。両脇には衛兵がビシッと直立して警備しており、ちょうど見学していたときが立ち位置の交代の時間だったようで、面白半分には眺めていたのだが、これがまた驚きのものだった。鞘から剣を抜き、上体の

前に剣を立てたままゆっくりと王冠の周りを半周し、再び鞆に収める。この一連の動きの間に一切声を出すことは無く、また微塵なズレすらなかったのである。その後小1時間程度見学していたが、こんなに豪華な建築を観るのは初めてで、見終わる最後まで息を飲んで、感嘆の息を出していた。この王宮は見るだけで一生の思い出に花を添えることは間違いないので、ブダペストに行かれる方には是非オススメしたい場所であった。

【東南欧 26泊 28日の旅: ブダペスト後編～飽きるまで風呂入ってみた～】

ハンガリーは日本に負けぬ温泉大国。冬の時期でもあるし、何より留学を始めてからほぼ半年、湯船には浸かってないので、ハンガリーで温泉に入ることはこの旅の1つの目標であった。ブダペスト滞在中の3日間、毎日温泉に入りに行った筆者が、ハンガリーの温泉の特徴をお教えしようと思う。

まず日本では考えられないのが、基本的にスパは男女混浴だということだ。もちろん我々は知恵の実を食べる前のアダムとイブではないので、入浴に際しては水着を着用しなければならない。ハンガリーでは、公衆浴場は身体を洗ったりするお風呂ではなく、スパリゾートや医療目的として利用されているようだ。なので、日本みたいに浴槽の隣に体を洗うところがあるわけではなく、少し離れたシャワースペースで私は体を洗っていた。ちなみに、カメラを持ち込んで撮影しても問題ないらしい(筆者は試さなかったので、本当かどうかは不明である)。

お湯の温度は28度のぬるま湯から38度のあったかいお湯まで様々あり、日本の温泉のような40度台の温泉は少ない。その為、皆1時間や2時間平気で湯船に浸かるので、喉が乾いた時用に無料の飲料水が出るコーナーがちらほらある。さらに温泉だけでなく、プールやサウナもあるので、本当にスパリゾートという感じだ。規模の大きいところや有名な温泉は人が多いので、落ち着いて入りたい人は中・小規模の温泉に行くといいだろう。

値段は温泉の大きさによって変わるが、3000～5000フォリント程度。外湯に来たと考えると少し高く感じるかもしれないが、何種類も湯船があり、また各施設によって様式が全然違うので、異国のスパに来たと考えれば安いと思う。ブダペストの温泉は硫黄の源泉なのか、独特の卵臭さを少し感じ、個人的にはあまり好きではなかったが、友達や家族で来るときっと楽しい思い出になるだろうから、ふらっと寄ってみるのも一興だと思う。こんな書き方はしているが、結論としては”風呂に入ることに飽きなどない”であった。

[次回予告]…温泉に入り続け、ふやけにふやけた筆者は夜のウィーンへと

再び降り立つ。3月半ばも過ぎたのに、雪が降りしきる極寒のウィーンは一瞬で体を凍てつかせたが、ウィーンにはウィーンなりの温かみがまたあるのだった…。Nächste Mal、【東南欧26泊28日の旅：ウィーン編～甘美な味わい、気品と伝統の裏に～】

そして、来月からは夏休みスペシャルとして、旅行記ページを増大！ウィーンを発った後は、チェコの首都プラハへ。その一大観光名所として知られるプラハ城・カレル橋を見て、あまりの面白くなさにがっかりする筆者。果たしてこの街に魅力的なスポットはあるのだろうか。Google先生が教えてくれる、一筋の光明とはいったい…？【東南欧26泊28日の旅：プラハ前編～神秘の探求・隠された調合～】もお楽しみに。

今回は【地元民もあまり行かない？ライン川になぜかあるビーチに行ってみた】、【東南欧26泊28日の旅：ウィーン編～甘美な味わい、気品と伝統の裏に～】【東南欧26泊28日の旅：プラハ前編～神秘の探求・隠された調合～】について書いていこうかと思えます。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/08/1 ～2018/08/31)

1. 勉学の状況

これといって書くこともないので、今月はお休み。

2. 生活の状況

【地元民もあまり行かない？ライン川になぜかあるビーチに行ってみた】

ドイツも7月に入ると、流石に長袖で過ごすのはシビアになってくる。この国では冷房設備がまだまだ普及していないので、室内では汗をかきながら、団扇を扇いで暑さを凌ぐしかない。こうも暑いと、どこか海にでも行って泳ぎたくなるのだが、海に面している北部のハンブルクまで行って泳ぐのは面倒なので、(これは今度の旅行の時まで我慢だなあ…)なんて思っていた。そんなある日、ドイツ語クラスのクラスメイトが、「今度友達と遊びに行くんだけど、クラスの皆も一緒に来ない？」と誘ってくれた。もちろん快諾はするのだが、当日になるまで何をして遊ぶのかは全くわからないのが恐ろしい…。

そして当日、クラスメイト達と Hbf で集合して、今日の予定を立てているクラスメイトの友人に引き連れられ、我々はライン川の方向へ歩いていった。ラインタワーを通り過ぎ、橋を渡ったりして歩くこと 20 分、そこには小さいながらも砂浜が広がっていた。湖になら私の故郷でも見たことがあるが、まさか川にもビーチがあるとは。そうまでして砂浜で遊びたいのだろうか。あちこちで遊んできたドイツ人の友達に、よくこのビーチで遊んだりするのか聞いたところ、彼も人生で初めてきたらしいので、多分地元民でもあまり行かないのだろう。利用客は、川で水を掛けあったり、ビーチで身体を焼いたりボールで犬と遊んでいたりと、思い思いに過ごしていた。筆者達もそれに倣って、川に足だけ入れて涼んだり、サッカーボール版蹴鞠をしたりして、暑さを忘れるくらいに夏の1日を満喫することが出来た。近年、地球温暖化の影響でドイツでも猛暑日になることがあるので、暑さに耐えきれなくなったら迷わず友達とビーチに行行って、楽しく暑気払いするのがおすすめである。

【東南欧26泊28日の旅：ウィーン編～甘美な味わい、気品と伝統の裏に～】

3月17日夕方、ハンガリー国鉄所有のボロボロの客車、二等コンパートメントで揺られる中、ヨーロッパでは珍しく、警察による国境越えのパスポートコントロールがあった。別に犯罪者ではないのですする必要は全く無いのだが、スイスばかりを警戒していた(理由は2月分報告書を参照)ので、緩そうなイメージ(失礼)のオーストリアでまさか調べられるとは想定しておらず、取り出すのに時間がかかってしまった。チェックを終えて扉が閉められると、今度は反対側から警官が来て、「こんにちは～。パスポート見せてくださ～い。」なんて言ってきたので、コンパートメントにいる全員で「もうやったっちゅうねん。」と英語とドイツ語で一斉にツッコんだのが妙に記憶に残っている。

そんなこともありつつ、筆者たちはウィーンHbfに到着。友人が妙に嬉しそうな顔をしているので、なんでそうなのか聞いてみると、「だってドイツ語通じるんだよ！」といい笑顔で答えてくれた。(コイツ、イタリアで妙に硬いカオしてんなって思ってたけど、そうゆうことか。俺の心配は何やったんや…)などと思ったが、ここはドイツ語にそこまで馴染んでいる友人に素直に関心しておくことにした。駅裏のトラム乗り場に行こうとHbfを出ると、路面にはうっすら雪が積もっていて、耳を千切りにされてるんじゃないかっていうくらい空気が冷たかった。重いスーツケースを引きずりながら夜の坂道を登って行くのがメチャクチャ辛かったのは今でも覚えている。どこぞの機関の「世界住みやすい都市ランキング」でウィーンは今年1位になったそうだが、あの冬の寒さを調査員が知ったら、再評価間違いなしだと私は思う。

突然ではあるが、皆さんはウィーンに対してどんなイメージを持っているだろうか。芸術の都？それとも絢爛豪華な宮殿だろうか？私は世界一スイーツが美味しいのはウィーン、というイメージを昔から持っていた。特にザッハトルテは世界的に有名なケーキであるが、その由来はウィーンにあるホテルザッハーが考案したケーキだと言われている。今や、ウィーンの街中にある大概のカフェにザッハトルテは置いてあるが、どうせ来たのならオリジナルを食べてみよう、ということで私と友人はオペラ座すぐ近くのホテルザッハーへ行くとこにした。陽が十分に登ってから街に出てみると、白馬の馬車が平然と車道を闊歩しているではないか。(これがウィーン、格が違えなあ…)と思ったものだ。ホテルの地階にカフェが設置されていて、入ってみると少しくすんだベルベットの絨毯が目立つ、なんとも重厚感のある品格の内装だった。お昼ご飯時に行ったおかげか、程よく満席程度だったのでそんなに待つこともなく席へと案内してくれた。私は

ザッハトルテと、これまたウィーン名物というメランジュという飲み物を注文した。そしていよいよケーキがサーブされる。(ほお、これはなかなか…)が初見の印象。言ってしまうえば、表面にチョコがコーティングされたケーキなのだが、そのチョコが絶妙な艶を持っていて、シンプルながらこれまで積み重ねた歴史に裏打ちされた誇りを感じられる。食べてみてもまた然り。自分には少し甘すぎる感があったが、決して否定されるような味ではなく、これまで多くの人に愛されてきたことがわかる、まさに戴冠されしケーキといえよう。この王者たるザッハトルテ、ウィーンに来たらどうして食べずにいられようか。

余談ではあるが、別のカフェに行ったときに(これもまた人気店である)、店員から「カードであまり払って欲しくない」という話を聞いた。その店員さんだけかもしれないし、自分の拙いドイツ語で聞いた話なので定かではないが、コーヒー1杯でカード払いを望んでくるアメリカ人が多らしく、いちいち機械を操作するのが面倒だと愚痴を言っていたので、ウィーンでカフェに行く際は、お札1枚・小銭少々をポケットに忍ばせて、スマートにお会計するのがベストだろう。

【東南欧26泊28日の旅:ウィーン編~VIP達も泊まるホテルでルームサービス頼んで見た~】

世界一優雅なときが流れる街・ウィーン。普段はさもしい生活だけど、折角そんな街に滞在するんだから、一泊くらいまともなホテルで非日常の優雅さを味わおうではないか、というプランが筆者と友人との間で立ち上がった。(どれ、ここはひとつ、友人のセンスを試してみよう)というウルトラ上から目線な理由でホテルの手配を丸投げしたところ、自分の予想をすっ飛ばして”Hilton Hotel”を予約するというハイセンスぶりを見せてきた。Hiltonといえば、各国の要人や首相も滞在する優良ホテル。宿泊費もバカにならないのではないか(この感覚は皆さんと同じなのだろうか。)と思っていたのだが、冬のオフシーズンのおかげもあったのか、思いの外安かったという印象である。冬のヨーロッパ旅行では、一流ホテルも案外狙い目かもしれない。そんなわけで一晩だけの煌めく夢、開演である。

エントランスから”場違い”を感じながらチェックインをして、ルームキーを貰った。今回用意されたのは2階の角部屋。わざわざ角部屋を指定したというのだから、友人もなかなかこだわっているようだ。部屋からは表通りと公園、そしてよくわからないが雰囲気のある教会が見えるという眺望の良さ。普段泊まってるホテルとは明らかに違うまともな室内設備もあってか、かなり感動したのを覚えている。そして夜になるとよくわから

ない教会がライトアップされて、綺麗な夜景を眺めることが出来た。正直そこいらの観光名所より記憶に残っている。「こんな夜に外を出歩いて、寒い中レストラン探すのダルくない？」という意見が出てくるのは、もはや必然といえよう。(初めてのルームサービスを、まさかウィーンで受けることになるとは…)、ウィーン・ヒルトン・ルームサービス、この3つの単語が並ぶとロマンを感じてドキドキしているあたり、私もまだまだ下流であることがわかる。

友人はヴィーナーシュニッツェル、私はラゲーソースのパスタとサラダを選び、(どんな風に運ばれてくんのかな?)なんて考えながら待つこと10分、コンコンコンとドアが3回ノックされる。ドアを開けると、頼んだ料理が白いテーブルクロスをかけられた大きな台車に運ばれてやってきた。(それどうやって持ってきてん!?)なんて思いながら、台車を部屋に運ぶ。台車は運搬用ではなく、そのままテーブルとして使うらしい。「食べ終わったら廊下にテーブル出しといてください。」とあって、特にチップを貰おうという姿勢も見せず、スタッフはスタスタと帰っていった。こっちはこっちで、いそいそと飲み物と椅子を用意していただくことに。食べてみると、普段の食事にはない、明らかに何かに気を遣っている感じの味がした。要は「美味しい」、それだけである。それに想像よりはるかにボリュームもある。「綺麗な夜景を眺めながら、美味しい食事を食べてる俺ら、生意気だよね～」なんて言いながら、我々なりの優雅なひと時を堪能した。ちなみに、3品頼んで50ユーロだったので、そこらのレストランと対して変わらない価格だと思う。なんだか日本だとひどく高いイメージをルームサービスに持っていたので、こういう経験をするなら、少なくともウィーンでは値打ちものだと思う。

【東南欧26泊28日の旅：プラハ前編～神秘の探求・秘されし調査～】

3月21日、なまじウィーンの良さを知ってしまったがゆえに、後ろ髪引かれる思いでプラハ行きの列車に乗り込む筆者。車窓をボーっと眺めてても平坦な野原が流れてゆくだけで暇なので、月間報告書を書いて暇を潰したりして4時間、列車はプラハ・ナドゥラツィ駅に到着した(正直、読み方が合っているかは不明である)。昨晚のHilton Hotelとは打って変わってボロい安ホテルに着いた筆者は、(まあ、自分の身の丈にはこれが合ってるのだろう)なんて悲しい諦めをつけて、少しカビ臭いベットに横たわるのだった。

翌日、生憎の曇り空の中、とりあえず観光名所らしいプラハ城とカレル

橋に行ってみただけだが、どんよりとした天気が素朴な外観により寒々しさを与え、その上、昔使われていた処刑道具・拷問器具なんて見せられてはたまったものではない。その日の晩ご飯は、いささか味気なさを憶える有様であった。

プラハで2回目の朝を迎え、のんびり屋の私は珍しく焦っていた。このままではプラハがつまらない都市、というイメージで終わってしまう。そんなはずはない、なにか面白い場所は無いのか、とGoogle先生に教えを請うたところ、ある、あるじゃないか！プラハには他の都市には無い、一風変わった博物館が沢山あるのだ。木製のツェッペリンを展示する現代美術館から、現在の日本では間違いなく検閲されるような博物館まで色々あるのだが、今回最も興味を引いたのは“錬金術博物館”である。子供の頃よく読んだ本に登場した錬金術、てっきり架空のものだとばかり思っていたが、まさか実在するとは。現実ではどんな研究をしていたのか気になったので、早速行ってみた。

ドアをくぐると、形から大きさ・中身の色までそれぞれ異なる謎のポーションが、両側の壁に陳列されていた。RPGゲームをやったことのある人なら知っているかもしれないが、それはエリクサーという、錬金術師たちが編み出したレシピによって調合された特別な薬で、それを飲むことで頭が良くなったり、異性を惚れさせたりと、通常では得られない効能を得られるという代物。(ホンマに効果あんのかな?)なんて思いながら繁々と眺めていると、受付のお姉さんから「見学する？」と聞かれたので、「したいです。」と答えると、「うちはガイドツアー形式だから、時間が来るまで待ってて」と言われた。普段、美術館などは1人で勝手に見学するので、たまには案内してもらおうのも一興だな、なんて思いながら首を縦に振った。

この日の天気は雨だったのに、待っているうちに結構な人数が集まってきた。時も人も満ちたところで、ミステリアスなツアーが始まった。薄暗い通路を通りぬけると、壁の四隅に錬金術で使われる四元素のモチーフとラテン語での名前が書かれていたり、古めかしい本や薬が置かれた戸棚があったりと、“いかにも”な感じの部屋があった。ここではヨーロッパでの錬金術の歴史や、時の権勢との関係性についての話がされた。

「ところで、錬金術師達はどこでエリクサーとかを作ってたと思う？」とガイドさんが質問してきた。我々が首を捻っていると、「実はこんなところでやってたんだ。」とあって、戸棚にあった金の置物を右に傾けると、戸棚がスライドして地下への入り口が現れた！人間、隠されたものがあるとわかると興味を持つのは普遍のようで、皆んなして「おお～」なんて声を出していた。地下空間はかなり広く、薬草を干す場所や調合の為に使う

火をおこす場所があった。

ひとしきりツアーが終わり、最後の質問タイムがあったので、「現代社会にもまだ、錬金術はあるんですか？」と聞いたところ、なんとまだ存在するらしい。いつの日か、賢者の石が完成する日が本当に来るのかもしれない。完成したから自分がどうにかなる、というわけではないけれども、なんとなく完成してほしいので、細やかなお布施として小さいエリクサーを買って美術館を後にする筆者であった。

【次話予告】…長きに渡る旅路もついにフィナーレへ。ドイツへ再び入国した筆者たち。最初の街ドレスデンで、まさかあの街の真の凄さに気づかされるとは…。そして、ついにデュッセルドルフへ帰宅する日。最速最上の列車での家路の中で、筆者は何に想いを馳せるのか。Nächste Mal、【東南欧 26 泊 28 日の旅：最終話～ただいま、って呼べるかな～】

今回は【東南欧 26 泊 28 日の旅：プラハ後編～プラハに来たらこれを食べ！市内に唯一あるあのお店をご紹介～】、【東南欧 26 泊 28 日の旅：ドレスデン編～他国の素晴らしさも紹介するツヴィンガー宮殿～】、【東南欧 26 泊 28 日の旅：最終話～ただいま、って呼べるかな～】について書いていこうかと思えます。来月は勉学の状況で書くことがあまり無いと思われるので、生活の状況のテーマ数を増やします。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/09/01 ～2018/09/30)

1. 勉学の状況

特に書くこともないので、今月もお休み。

2. 生活の状況

【東南欧 26 泊 28 日の旅：プラハ後編

～プラハに来たらこれを食べ！市内に唯一あるあのお店をご紹介～】

これまで7都市を旅をしてきてわかったのは、自分の想像以上に日本食がヨーロッパに浸透してきているということだ。インターネットで検索すれば沢山の日本食屋が出てくるし、都市によっては、歩いているだけでちらほら見かけるくらいだ。ヨーロッパも当たり前のように箸を使い、舌鼓を打っているのには驚かされたものだ。そして8都市目・プラハには、ただ一軒だけ日本を代表するあの料理を提供する店がある。ドイツ行きの列車に乗る日、朝一で食べに行ってみた。

中に入ると、オシャレなカフェのような内装で、インテリアにはテーブルと椅子だけでなく、ソファや観葉植物もあり明るい雰囲気。開店早々入ったので、他のお客さんはいない。注文を済ませて待つこと10分。ゴトッとテーブルに置かれたのは、黒い器に独特な色のスープをたたえ、細切りのネギ・福神漬け・メンマ・煮卵が彩りを作っている。もうお判りだろう。そう、ここはプラハで唯一のラーメン屋である。私はとんこつラーメンを選んだのだが、これが美味しいのである。アッサリとしているのだが、決して薄いわけではなく、“味わい深く飲みやすい”スープなのである。正直これは、日本でも戦えるレベルの味で、今のところヨーロッパの中で一番美味しいラーメンである。(わざわざヨーロッパに来てラーメンなんて…)と思う方、そこらのレストランで食べても別に感動するわけではないので、レストラン選びが面倒になったときは迷わずここに行くことをオススメする。

【東南欧 26 泊 28 日の旅：ドレスデン編

～他国の素晴らしさも紹介するツヴィンガー宮殿～】

3月24日、日本より北のプラハでも春の訪れを感じれるようになったこの日、人生初の“朝ラーメン”をまさかのプラハで体験し、予想以上のクオリティに大変満足した筆者と友人は、国際列車EC(ユーロシティ)2等コンパートメントに乗り込み、一路ドレスデンを目指す。山間部を流れる川を窓越しに眺めながら、筆者は少し哀愁を感じていた。長く旅をしていると、(これから先、永遠と世界のどこかを訪れては、また旅立ちを繰り返していくのか…)なんて錯覚してしまう。だから、“ドイツに帰る”という事実を認識した瞬間、信じられずに思わず笑ってしまったが、列車が進むにつれて、旅の終わりも近づいてきているのだと思うと、真綿のような哀しみが心を包み込む。14時30分、ドレスデンに到着。駅近の綺麗なホテルにチェックインして休憩した後、学割のある日本食屋(これがまた美味しいのだ)で晩御飯を済ませてその日は終わった。

翌日、夕方のベルリン行きの列車まで時間があるので、観光場所として有名なツヴィンガー宮殿に向かった。全体の造りとしては小さい洋風皇居のような感じで、宮殿の周りをお堀が囲っている。内側は中庭になっており、宮殿を1枚の写真に収めようとゆっくり回っている人がちらほらいた。宮殿も十分に美しくて結構なのだが、中には美術館があるということなので、入ってみることにした。美術館は中世絵画や彫刻を扱っており、有名どころではクラナハの絵などが飾ってあったが、上の階に上がると風景画が展示されていた。そこにあったヴェネツィアの風景画を観て、筆者は驚いた。つい先日行ったヴェネツィアとほぼ同じ景色が描かれていたのだ。普通、街は100年もすればほとんど変わってしまうものだが、ヴェネツィアは少なくとも江戸時代初期の頃からほとんど変わらずにある街だったのだ。何気ない街の風景のワンシーンなのに、自分がそこを歩いたかどうかがわかるのだから、いかにヴェネツィア市民が、イタリアという国があこの街を守ってきたのかがよくわかり、ヴェネツィアの偉大さに感服しっぱなしな筆者であった。

【東南欧 26 泊 28 日の旅:最終話～ただいま、って呼べるかな～ 前編】

ドレスデンから3日後の3月28日朝、筆者はベルリンにいた。ベルリンで

も観光はしたのだが、前の報告書(※2018年01月分参照)でベルリンの様子は紹介したので、ここでは省略させていただく。いよいよデュッセルドルフへと帰るこの日、私はうきうきしながらホテルで身支度を整えていた。今回は、DB(ドイツ国鉄)で現在最速の列車、ICEの1等車両に乗車するのだ。(初めて乗るICEがいきなり1等、いいんですかねえ…)とか思っているうちに準備が終わったので、足早にベルリンHbfに向かった。

さて、ここでDBの特急車両における1等車と2等車の違いを説明しておこう。主な違いは2つあり、1つは座席の質、もう1つは特典の有無である。座席の配置は2等車両が2×2の1列4席、1等車両は2×1の1列3席となっており、当然1等のほうが座席の幅が広い。シートピッチも広めに設計されており、大柄なドイツ人でも楽に足を伸ばせる。また、1等車両利用者は特典として、乗車前・乗換駅・到着駅にある専用ラウンジを無料で利用でき、軽食・飲み物をいただける。これだけの差がありながら、早い時期に予約すれば10、20ユーロの追加料金を払えば1等車両に乗車出来るのだから、おいしい話である。(※2018年8月からDBはサービスを変更し、最安値のチケットを取った人はラウンジが使えなくなったのでご注意を!)

朝9時半、ベルリンHbfに着いた筆者は早速ラウンジに入った。チケットにあるQRコードを読み取り機にかざすと入ることが出来る。スタッフに「奥に行ってください」と言われたので大人しく行ってみると、別のスタッフが立っており、再度QRコードを機械で読み取った。どうやらこのベルリンのラウンジ、1等車両利用者のために専用スペースを別で用意しているようで、突然のプチVIP待遇に驚きながら椅子に腰掛けるのだった。

さて、ひとまず落ち着いたところで飲み物でも取りに行こうかとした時、スタッフの方が話しかけてきた。

「おはようございます、軽食が選べますが何になさいますか？」

「……えっと、今日は何がありますか？」

「クロワッサンは無くなってしまいまして、サンドイッチと〇〇(よく聞き取れなかった)がございます。」

「じゃあサンドイッチで」

「わかりました。何かお飲みになりますか？」

「コーヒーを」

「かしこまりました。」

そうやってスタッフの方は奥に行き、5分後には自分の席に持ってきてくれた。飲み物を取る手間も取らせない、徹底したサービス。(ドイツにもこんなサービスあるんだなあ)と感心したものだ。食べ終わると「何かまだお召し上がりになりますか？」と聞いてきたので、結局サンドイッチ1

つにコーヒー1杯を追加でいただいた。もしかしたら、おかわり自由なのかもしれない。(実際にはやらないが)

あまりに良いサービスに思わずラウンジに長居してしまい、ダッシュでICEに乗り込む羽目になったが、息を切らしながらも無事に自分の座席へとたどり着いた。今回は1列席を予約。黒い合皮のシートに可動式ヘッドレスト・フットレストがあり、左下にあるレバーを引くと、座面と背面が連動してリクライニングする。テーブルは前後に動かすことは出来ないが、各席に1つずつコンセントがあり、パソコンやスマートフォンの長時間利用にも対応している。座ってみると、皮のシートがしっかりと身体を包み込み、リクライニングしても座面が動くので、浅く腰掛けても長時間座っていられる座席であった。息が整ったところで、終着デュッセルドルフまで後4時間…。

【東南欧 26 泊 28 日の旅:最終話～ただいま、って呼べるかな～ 後編】

たまたま通りかかった車掌を呼び止めた。連結されている食堂車を予約無しで使えるかどうかを確認するためだ。すると「使えますけど、そうしなくとも座席までサーブしますよ。」と返ってきた。なんということだ…。食堂車に行く手間すらもかけさせないとは、1等車両に乗るだけで随分な待遇になるものである。

注文したコーヒーとチョコレートケーキを時折口に運びながら、筆者はここまでの旅を振り返ることにした。スイス・リヒテンシュタイン・イタリア・ハンガリー・オーストリア・チェコ…28日かけて、陸続きの6ヶ国を周ってきた。数百キロ移動しただけで、言葉・慣習・景色などあらゆる部分が変わってしまうのに、同じ大地の上にあるというのは、島国日本に留まったままでは理解し得ないことだろう。今回周った国々の存在自体は当然日本にいた頃から知っていたが、留学先のドイツを起点にして位置関係を実感できたのは非常に意義深かった。そして今、約5ヶ月過ごしたデュッセルドルフに戻ろうとしている。短い期間とはいえ、居を構え日々を過ごし、さらに半年は過ごしていく場所だ。(デュッセルドルフが自分にとって、「ただいま」って言えるほどの思い出と繋がりのある場所になったんかな、それとも今回巡った都市と同じで、どこかアウェー感を覚えるんかな)、なんて考えると、旅に出ることがこれまでの生活を俯瞰的に見るきっかけにもなっているのだと考えさせられる。随分生意気な考えをしたものだ。ダルマイヤーのコーヒーは、そんな考えを嗜める大人の苦さ

だった。

コーヒーもケーキも思い出巡りも、満喫すれば4時間なんてあっという間で、ICEはデュッセルドルフHbfのホームに滑るように入っているところだった。28日ぶりの見慣れたホーム、エスカレーターを降りて出入口へ向かう。(よく無事に帰ってきたな)、目に入る全ての光景が自然と筆者にそう思わせた。通路を行き交う人々・構内にあるファストフード店の並び・駅を出ると現れる、薄汚れた灰色のコンクリートの道・その先で走っているバスや路面電車。どの国にもありそうな、平凡な風景。路面電車に乗って大学の寮に帰った。鍵を開けると、28日前と変わらぬ筈なのに、奇妙に新鮮味のある空間が広がっていた。これまで旅を共にした靴とスーツケースを転がして、ダウンコートも服も脱ぎ捨てて、ベッドに飛び込むや否や夢でも見ているかのように小さく呟いた。「ただいま」そう言って眠り始めた私は、一体何に安心したのだろうか。

【完】